

重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書

昭和六十二年三月

重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書

重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会

序 文

石室と五輪塔は二基組合せ一組となり長野県飯田市下久堅南原部落の文永寺門前にある。

石室と五輪塔はともに昭和五年文部省告示第一六一号により国宝に指定されたものであり、五輪塔は我国で一番早く指定を受けた鎌倉期の技法の優れた石造建造物であり、石室については我国で三番目に指定されたものである。

弘安六年（一二八三）の建立以来、雨露にさらされて今日に至ったが、近年石室全体にわたり風化破損が著しく進み、且つ沈下傾斜を生ずるに至り、修理保存につき、文化庁をはじめ、長野県および飯田市の関係者の指導・援助により、今回の修理となったものである。

修理事業費は総額八百八十万円、国・長野県並びに飯田市より補助を受け、昭和六十一年七月着工、工事期間六箇月を要して、解体修理工事が行なわれ、同年十二月滞りなく完了、往時を偲ぶ建物の再現を見るに至った。所有者である寺をはじめ、関係者の喜びこれに過ぎるものはなく、この貴重な石造文化財を永く後世に伝える所信をあらたにするものである。

この報告書は、工事の記録と工事中の調査に基づく各種資料をまとめたもので、この文化財を広く世に紹介すると共に、後世に伝える資料として活用されることを願うものである。

終りに、御指導御助言を寄せられました文化庁・長野県・飯田市その他の関係各位並びに工事の設計監理とこの報告書編集に当られた財団法人文化財建造物保存技術協会の各位に対して心から謝意を表する。

重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会

委員長（飯田市教育長） 福 島 稔



長野県略図

例言

一、この報告書は文永寺石室・五輪塔保存修理に関する補助事業として編集刊
行したものである。

二、編集に当たっては今回の工事の概要の他、工事中の調査事項及びこの石造建
造物に関する各種参考資料などをまとめた。

三、図面及び写真については、工事中複製又は撮影した多数のうちから、図面
については記録保存図（原図は文化庁に提出保管）とその他の説明図を、写
真については修理前・後、並びに工事中の記録と各種資料写真の主要なもの
を掲載することとした。

四、本文、図面共表示寸法は「メートル」によつたが、必要に応じて「尺」を
併記した。

五、竣工写真は飯田市・有限会社松沢カメラに委託した。

六、本書の編集及び担当は左記によつた。

保存修理編集担当	財団法人 文化財建造物保存技術協会
本文 第一章、三章の一部分	工事監督 広瀬 沸
本文・図面	工事主任 岸 茂
写真（修理前・工事中）	工事主任 岸 茂

発掘調査編集担当 飯田市教育委員会

本文 第四章

文化係学芸員 小林 正春

図面・写真

調査員 佐合 英治

梶井 弘人

佐々木嘉和

重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書

目次

第二章 工事内容

第一章 建造物の概要

第一節 概説

- 一、位置と現状…………… 1
- 二、文永寺石室と五輪塔の基本形成について…………… 1
- 三、指定説明…………… 2

第二節 文化財指定

第三節 規模

- 一 石室…………… 3
- 二 五輪塔…………… 3

第四節 構造形成

- 一 石室…………… 3
- 二 五輪塔…………… 3

第一節 工事の経過及び組織

- 一 着手に至るまでの経過…………… 4
- 二 修理概要…………… 4
- 三 工事運営…………… 4
- 四 工事関係者…………… 4
- 五 工事工程表…………… 5

第二節 実施仕様・工事事務

- 一 実施仕様…………… 6
- 二 工事事務…………… 12

第三節 工事費

- 一 収入…………… 13
- 二 支出…………… 13

第三章 調査……………15

第一節 破損状況……………15

一 石室……………15

二 五輪塔……………16

第二節 現状変更……………16

第三節 形式技法……………18

一 石室……………18

二 五輪塔……………19

第四節 類似調査……………20

一 石室……………20

第五節 参考資料……………24

一 石造物……………24

二 古文書……………26

三 金石文……………28

第四章 発掘調査……………30

第一節 調査経過……………30

一 周辺部調査……………30

二 敷石等取りはずし作業……………30

三 下部施設の調査……………30

第二節 調査結果……………31

一 五輪塔・石室の基礎について……………31

二 下部施設……………32

第三節 出土品について……………32

一 常滑焼大形甕……………32

二 副葬品……………33

三 その他の出土品……………34

四 まとめ……………34

写真目次

1 / 14	竣工・修理前
15 / 22	破損状況
23 / 34	解体工事
35 / 38	現状変更
39 / 56	組立工事
57 / 61	類似調査(石室類)
62 / 73	資料
74 / 101	掘堀

挿図目次

第一図	土台石・敷石不同沈下	7
第二図	石室傾斜	7
第三図	基礎配筋図	8
第四図	基礎平面図	9
第五図	基礎断面図	9
第六図	錠補強図	11
第七図	石室破損図	15
第八図	敷石	17
第九図	平面図	17
第一〇図	敷石	18
第一一図	土台石・屋根石の軸摺穴痕跡	19

図面目次

第一二図	仏隆寺石室平面図	21
第一三図	十輪院石仏龕断面図	21
第一四図	岩船寺石室平面図	22
第一五図	守福寺宝殿平面図	22
第一六図	守福寺宝殿断面図	22
第一七図	土台石・敷石等平面分布図、南北方向断面図	36
第一八図	下部施設	37
第一九図	下部施設常滑焼壁及び内部出土遺物	38
第二〇図	下部施設内部出土銭貨	39
第一図	竣工・修理前	7
第二図	修理前 平面図(石室・五輪塔)	7
第三図	竣工 正面図(石室・五輪塔)	8
第四図	竣工 側面図(石室)	8
第五図	竣工 断面図(石室・五輪塔)	9
第六図	修理前 断面図(石室・五輪塔)	9
第七図	竣工 立面図(五輪塔)	11

第一章 建造物の概要

第一節 概 説

一、位置と現状

文永寺の所在する飯田市は長野県の南部に位置し、舟下りで有名な天竜川が流れている。市内には文永寺の他に旧小笠原家書院、開善寺山門が重要文化財に指定されている。

文永寺は飯田市の東南、天竜川の左岸の台地上にある。開創は文永元年(一、二六四)伊奈の地頭知久信貞を檀那とし、開山は隆亮あるいは龍光と伝える(注一)。京都醍醐寺理性院に属し、創立以来本寺との交流を通じて朝廷の信頼も厚く、勧願寺として隆昌し、文明年中には本堂、阿弥陀堂、塔など主要伽藍のほか多数の坊を擁して繁栄した(注二)。

天文二十三年(一、五五四)武田信玄上洛の際兵火に遭って一山悉く焼亡し、元龜三年(一、五七二)再興されたが(注三)、武田氏滅亡後は次第に衰微し、寛永十年(一、六三三)伽藍を現在地に移したと伝える(注四)。現在の建物の多くは享保四年から十六年(一、七一九-三二)頃の再興になるものとみられる(注五)。石室は寺の西北の飛地境内にあつて南面し、切妻造平入の石室内に五輪塔を安置する。造立年代は屋根石下面の刻銘から弘安六年(一、一八三)、神教幸によつて造立されたことが知られる(注六)。五輪塔も形式手法からみて石室と同時期の作と見做される。造立後の沿革については明らかでない。

(注一) 寺の由縁を伝える記録として寺蔵文書に「文永寺略縁起」、「文永寺開起之由来」の二つがある。前者は十九代住職龍昌(寛政七、文政八)の誌したもので、後者は年代不詳であるが江戸時代後期の作とみられる。略縁起によれば、龜山天竺の勅使を受けて年号を以つて寺号を賜つたとあり、開起之由来では文永年間、理性院の弟子龍光を開山に迎へたとしている。なお、創立についての記載は両書で異なるが、その後の沿革についてはほぼ同一内容である。

(注二) 寺蔵文書に文明七年に行われた灌頂会費の状況を記した「結縁灌頂縁記」(天正十三年写)があり、その記載及び「三昧耶戒道灌頂記」によつて、当時本堂、阿弥陀堂、塔、鐘樓等のほか密衆院と稱する任所のあつたことが知られる。また、天正十五年の飛地帳に文永寺十二坊の名と石高がみられる。

(注三) 天文焼失後、その再興を促す武田信玄に対する正頼町長官の諭旨(弘治四年)武田信玄の再興のための寄進状(元龜三年)いづれも文永寺所蔵。専によつて縁起が分かる。

(注四) 「文永寺由來誌」(大正三年写、宮川和健氏蔵)に第十、十一世観円の代、寛永十年に上の寺地より伽藍を残らず移したという記載がある。

(注五) 「略縁起」開起之由来」に十五世英後代に寺を中興し、護摩堂、客殿、如来之本堂、勧願門を陸直した旨の記載がある。

(注六) 屋根石裏面に下記のとおりである。

この寺の檀那、知久氏の出自は神氏系と云われ、
開基である信貞は伴野庄知久郎(現在の飯田市、豊丘村、磯木村の一部)の地頭で、神ノ城主。鎌倉幕府の御家人で、正徳二年正月の御釣給に射手を勤めたことが、「吾妻鏡」にみえる。神教幸は信貞の息子である。

弘安六年 左衛門尉
关未十二 月二十九日 神教幸
神教幸造 生年六
南部石工 十歳
實原行長

二、文永寺石室と五輪塔の基本形成について

石造美術の權威者である川勝政太郎博士、石田茂作先生の資料によつても窺えるよう我國の石造建築は平安以降のものが残されて、江戸時代に至る範圍内

の優れたものを文化財指定の対象とされて現存する石室の最古のものは前記の如く平安時代建立の仏隆寺石室であるが建立年代は不明である。水が弘安六年(一、二八三)建立銘のある長野県飯田市に在る当文永寺石室である。また五輪塔は中国の唐代にあつても、我が国平安時代初期においても、全く建立の实例がなく、平安末、我が国密教に於いて創始された塔形であり、下より方・円・三角・半月・圓形の五輪図が成り、これを地・水・火・風・空の五大を現わすものと研究整理されて明治二十年頃より関野貞博士、明治三十九年より天沼俊一博士、その他の学者によつて全国の石造物調査がなされ、五輪塔においては、保安三年(一、一一三)の銘ある京都・法勝寺出土の瓦文五輪塔で地輪にあるべき文字が水輪にあり、平安以前のものは、これ一つを知るのみで伴別しがたいがこの頃では五輪図形とは關係がなかつたと思われる。それから四十七年後の仁安四年(一、一六九)に當り、岩手県中尊寺の釈尊院石造五輪塔に就つてはじめて各輪に四門の梵字(種子)があることが注目されている。これに続き平安期のものが五基(釈尊院を含む)鎌倉のものが二十六基、室町七基、桃山一基、江戸一基が指定物件となつていて、文永寺五輪塔は鎌倉期の石造五輪塔中全国では最古のもので、石室内に安置されて風雨に露されたことなく鎌倉期の典型的美しい形態を保守して来いて貴重なもので五輪塔としては全国で第一番に指定を受けたものである。

以下五輪塔には梵字(種子)の刻まれているものもあるが、刻まれておるのが普通で塔には所謂五輪塔四方門の種子を刻んでいる。この種子である梵字を例挙すると次の通りである。

東方梵心門 梵心門―東方 囉等の思想で所謂立志で乘師如来の道。

南方修行門 修行門―南方 日中等の考え方で所謂不息に働く世界で宝生如来の道。

西方菩提門 菩提門―西方 暮方の思想、回顧、慕いの世界で阿弥陀如来の道。

北方涅槃門 涅槃門―北方 真夜中の考え方で梵の世界、釈迦如来の道。

空 風 火 水 地

右の如く文永寺五輪塔の建立は弘安六年であり、東南を間違えてか、意識してか(注一)南面(正面)に東方梵心門の梵字が刻まれており、西方に南方修行門、北方(裏面)に西方菩提門、東方に北方涅槃門と方位を一小間変えて右記のような種子が刻み込まれて五輪塔形式を整えている。

(注一) 昭和五十六年修補報告書による大分県野津町五輪塔(鎌倉)も南面、この面に東方梵心門の梵字が刻み込まれて、当文永寺と同様の状態である。

右のことから塔は作製時四面に、四方門の種子を刻み各自体の形体を整えておいて現地建立時は敷地の關係で、東、西、南、北には拘わらず、正面に位した処へ東方梵心門を向けているのか、この点不明、今後の研究課題として調査を要する。

三、指定説明

間口五尺一寸、奥行四尺九寸、高六尺ノ石室内ニ、高四尺ノ五輪塔ヲ安置セル者ニシテ、石室屋蓋ノ下面ニ刻マレタル銘文ニヨレバ、弘安六年癸未十二月二十九日、神教等が南都石工曹原行長ヲシテ作ラシメシモノデアル、五輪塔ハ風雨ニ暴露サレシコトナキヲ以テ、保存尤モ良ク、形跡完好ニシテ年代モ正確ナルノミナラズ、此カ、ル石室ヲ有セルハ珍ラシキ例デアル

第二節 文化財指定

指定年月日

昭和五年五月二十三日

文部省告示 第一六一号

名称	員数	構造及形式	所有者	所有者の所在	所在の場所
文永寺 五輪塔	石室一基	石造切妻造	文永寺	長野県飯田市	長野県飯田市
	一基	石造五輪塔	下久堅成一四二	下久堅成一四二	下久堅成一四五―三

第三節 規

模

一、石 室

桁 行	石壁間真々	一・二八九
梁 間	正面土台石・石壁間真々	一・二〇〇
軒の出	正面側 石壁外面より屋根板石外下角まで 背面側 石壁外面より屋根板石外下角まで	〇・二四二
軒 高	土台石上端より屋根板石外下角まで	〇・二〇八
棟 高	土台石上端より棟頂上まで	一・七五五
平面積	石壁内側面積	一・二六〇五㎡
軒面積	屋根板石外下角内側面積	三・二二七㎡
屋根面積	平面面積	三・二三四七㎡
二、五 輪 塔		
地 輪	一辺(正面)	〇・四三〇
	高さ	〇・二七六
水 輪	直径	〇・三九四

火 輪 一辺(空石正面)

高さ

風 輪 直径

高さ

空 輪 直径

高さ

総 高 石室床石上端より空輪頂上まで

〇・二九一
〇・四〇九
〇・二六七
〇・二八八
〇・二二七
〇・二五八
〇・二〇六
一・一六七

第四節 構造形式

一、石 室

石造、矩形平面、切妻造り平入り。長石質花崗岩、ノミ切り仕上げ、壁石積上げて屋根乗せ置き、前面開放。南面建。

床石の四周に土台石を通し、正面開放、両側、背面と三面を平加工大石二枚をもって目違積の壁石積とし、平加工屋根石、正・背面二枚を棟にて突き合せ置き。この上に両勾配付一本造り棟石を置く。

内部床は全面一枚造りの床石とし、五輪塔をこの上に置き五輪塔下前寄りに地輪に接し納骨のため約一・五mの石蓋付穴がいており、この下部に納骨壺が埋納されている。正面側屋根石裏面に弘安六年癸未の刻銘がある。

二、五 輪 塔

長石質花崗岩、組上げ式、下より地・水・火・風・空輪より成る。風・空輪のみ一石で、地・水・火輪は別石。水輪の上・下端に太柄造り出し。風・空輪

は一石で下端に太梢遣り出し、地輪を石室床石中央に据置き、各輪組上げる。各輪四面に梵字蓮形あり。

第二章 工事内容

第一節 工事の経過及び組織

一、着手に至るまでの経過

石室、五輪塔は弘安六年以来七百余年を経過し、指定される以前より不同沈下、壁石の傾斜等が見られた。昭和四年八月に大規模地震対策特別措置法の規定に基づく東海地震防災強化地域指定を受け、その後事業計画書を提出、昭和六年三月一二日に文化庁より調査官が視察、緊急に保護対策を行う必要性が生じた。これにより昭和六一年三月一七日に設計を財団法人文化財建造物保存技術協会に委託し、基本設計書を作成し補助金交付申請書を取りまとめて国・県・市に提出し、昭和六一年七月一日より工事を開始した。

二、修理概要

解体修理

解体調査の結果破損箇所並びに改変事項も判明したので現状変更許可申請書を文化庁に提出し、昭和六一年二月一日付をもって許可を得た。

その概要は左記の通りである。

石室 地下遺構保存のため周囲にコンクリート布基礎、同スラズを打設して

遺構を保護。これにより石室を約四十cm地上した。

五輪塔 痕跡により約十三cm後退させ、このために現われた床石上端の納骨のための穴に石置をかぶせた。

その他石材表面の劣化を防ぐため全面に防水剤吹付け、折損部はステンレス鋼で補強接着した。

三、工事運営

工事実施に当っては、補助金等予算執行の適正と的確を計るため、重要文化財文永寺石室・五輪塔保存修理工事委員会を組織し、長野県文化課並びに飯田市教育委員会の指導を受けて、文永寺事務所において執務を行った。設計監理は財団法人文化財建造物保存技術協会に委託し、工事は指名競争入札による請負工事として実施した。

協会は設計監理事務所を工事現場に開設し、技術職員が常駐して設計監理の業務に当り、工事監督は必要に応じて現場に臨みそれらの総括指導に当った。

なお現状変更及び石材補修については随時文化庁建造物課係官並びに東京国立文化財研究所技官の御来場を得て技術指導を受けた。

四、工事関係者

長野県教育委員会

教育長

文化課長

文化課長補佐

文化課長補佐兼文化財保護係長

文化課文化財保護係主任

村山 正

宮下 哲

村沢 文一

小林 静男

石坂 秀雄

飯田市教育委員会

教育長

教育次長

社会教育課長

社会教育課文化係長

社会教育課文化係学芸員

重要文化財文永寺石室・五輪塔保存修理工事委員会

委員長

副委員長

副委員長

委員

委員

委員

委員

事務局長

事務局

事務局

事務局

所有者

設計監理者 財団法人文化財建造物保存技術協会

理事長

工事監督

工事主任

発掘調査

飯田市社会教育課文化係学芸員

福島 稔
唐沢 弘人
塩沢 正司
池田 明人
小林 正春

福島 稔

大沢 和夫

青島 政人

山下 舜平

唐沢 弘人

橋爪 喜六

岩堀 俊道

塩沢 正司

池田 明人

小林 正春

吉川 豊

新井 悦道

有光 次郎

広瀬 涉

岸 茂

小林 正春

五、工事工程表

工事請負者 平和工業株式会社 飯田市下久堅甲

調査員 佐々木嘉和、佐合英治、桜井弘人

代表取締役

常務取締役

木下 雅美

木下 貞広

区分	期間	昭和61年度												備考	
		7	8	9	10	11	12	1	2	3					
工事事務	着手準備														
	調査作成														
	記録作成														
	竣工図調整														
	報告書編集														
	報告書印刷製本														
	本工事	仮設工事													
調査工事															
解体工事															
基礎工事															
補修組積工事															
擁壁工事															
附帯工事		調査													
	周囲保護柵復旧														

第二節 実施仕様・工事事務

一、実施仕様

A、通則

① 総則

この仕様書は概要を示すものであって、記載外の事項又は疑問を生じた場合はすべて監督者の指示に従い施工した。なお実施に当っては更に詳細な仕様を定めて施工した。

② 材料検査

一切の材料はすべて係員が検査を行い、合格したものを使用した。

③ 施工図・現寸図型板

施工図は現場指示の都度、保護欄の格子割り付けは現寸図を起した。

④ 基準尺度

スチールテープにより目盛を施した長さ三・六mの検製間尺を作成し、全工事を通じての基準尺度とした。

⑤ 材料保管

使用する材料で係員の検査に合格したものは、すべて良好な状態で保管し、湿気・盗難・火災に対し充分な対策を講じた。

B、仮設工事

① 計画

道路を挟んで石室東方の畑地を借用し、工作小屋、石材保存場を設け近くの寺地休耕田内に監理事務所、便所の各仮設物を建設した。調査用足代は脚立足代とし、境界欄はロープ張りとした。

② 構造

イ、調査用足代は、高さ二・一m、歩み板は足場板用合板（規格品）二枚敷とし、工作小屋は単管組み、石材保存場は山土敷きとした。

ロ、事務所は軽量鉄骨組立ハウスとし、便所は簡易組立式とした。

③ 材料

イ、脚立足代、工作小屋、水盛遺形、境界欄等に使用した材料は左記を標準とした。

単管 外径四八・六mm、肉厚二・四mm、長さ適宜、JIS規格品

附属品 ベース、クランプ、ジョイントなど右記の附属品。

歩み板 巾二四cm、厚二・八cm、長四mの足場用合板（規格品）。

養生シート ナイロン製、防炎加工、第II類。

木材 杉一等。

その他 ナイロンロープ（径一〇mm）、釘、山土等。

ロ、事務所及び便所は左記を標準とした。

平屋建組立ハウスとし、JIS規格に合格した形鋼によって構成されたもので見本によって監督者の承認を受けたものを使用した。

④ 脚立足代

石室の南・北面に足代を設け、調査用並びに施工補助足代とした。高一一

mの脚立を三m間に配り、足場板をグリッパーで緊結した。

⑤ 水盛遺形

欄外に丸太杭打の遺形を設けた。杭は地中に堅固に打ち込み、頭はいすか切りとし、鉤掛けした水貫を監督者の指示によって指定高さに釘止めとした。

⑥ 工作小屋・石材保存場

規模は四m×五m。単管組み、四周を防炎シート囲い、屋根垂鉛引波形状板葺、床は山土敷とし、鋼木を適宜設けた。道路側面にも同様山土敷の石材

保存場を設けた。

⑦ 便 所

組立式とし、基礎は丸太杭打ち、便器は大小兼用とした。

⑧ 監理事務所

丸太木杭基礎、内部に天井及び間仕切を設けた他、製図台、棚等を設けた。

⑨ 境界欄

周囲保護欄の正・背面及び東面の三方と、工作小屋・石材保存場に境界欄を設けた。丸太杭（高一・五m）を二m内外に打ち、杭上方にロープ張りとした。

⑩ 諸設備

イ、監理事務所に左記の諸設備を設けた。

電 話 一般事務所用。

照明設備 総合盤、電灯四灯、コンセント二箇、スイッチ一箇

給排水設備 給水管（径一三〇、塩ビ）、水道メーター、流シ、一口ガ

スコンロ

口、工作小屋には二口コンセント一箇を設けた。

電話は石室東北方の電話柱より架空線により、電気は石室北方二mの電柱より架空線により、水道は公営水道を利用し、同北方隣室南庭内より露出配管とし、下水は監理事務所建設地横の農業用水路に排水した。

⑪ 危害防止

工事実施に当り、法規上必要な危害防止及び衛生上のことに関して適切な施設を設け、かつ防火対策を行った。

C 調査工事

① 実 測

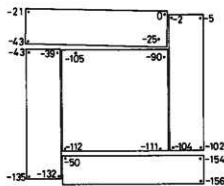
各部寸法を実測し、不同沈下、傾斜等を記録した。

② 石材破損調査

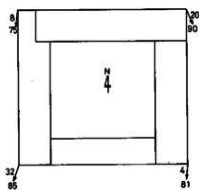
石材の龜裂部を全て記録し、表面の劣化状態の要所は突針で計り、解体時の添板補強位置、養生材の銅込み法、グリッパーの挟む位置の決定をした。解体終了後には、石材の破損度を再確認し、風化部補足石材規格等を調査し実施工法の詳細を決定した。

③ 痕跡調査

石室正面の土台石上端と屋根石下端の境界線と床石上端の地輪痕を調査した。



第1図 土台石・敷石不同沈下



第2図 石室傾斜

D、発掘調査

① 計 画

周囲保護柵内を範囲とし、文化庁に発掘届を提出し、地盤状態、基礎、地業の工法、地下遺構、旧地表の確認をするため発掘調査を行った。

② 発掘工法

最初に十字にトレンチを入れ、土層の断面状態を確認したのち三・五m四方の柵内を深さ四〇cm総掘り。この時点で骨蔵器を発見し、骨蔵器周囲の石組の深さを調べるため、南北方向に深さ九〇cmのトレンチを入れた。

E 解体工事

① 養生

写真撮影、実測、諸調査を行った後、亀裂の入った屋根石はバタ角で養生し、ビニールテープを用いて番付札を付した。

② 解体

棟石一本、屋根石二枚、壁石六枚、土台石四本、散石一枚を順序よく、グリップ及びびナイロンバンドにて吊り卸した。バンド吊の時は石材角部にし形の硬質ゴムパットをあてた。吊り卸しはクレーン車を用いた。

③ 格納

解体した石材は再用・繚いに区分し、同種材毎に整理して損傷がないよう養生して格納した。

F 基礎工事(石室)

① 計 画

地下遺構保存のため遺構周囲にコンクリート布基礎で保護し、さらにコンクリート布基礎上にコンクリートスラブを敷き、この上に石室を組上げた。

② 地 業

イ、材 料

栗 石 五〇〜一五〇mm 砕石

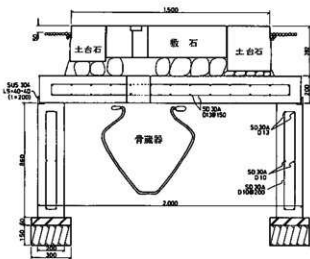
目潰し砂利 五〜四〇mm 砕石

コンクリート Fe二〇kg/m³ スランブ一八cm

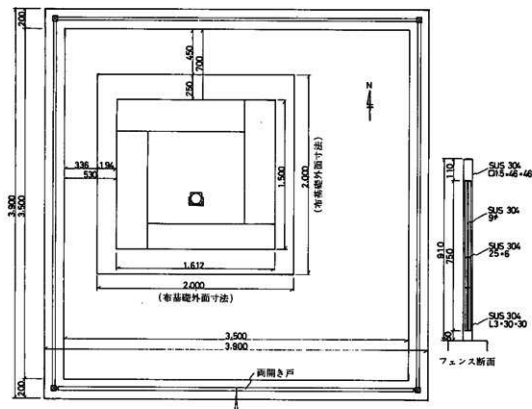
鉄 筋 S D 三〇 A I D 二三・一〇mm

ロ 工 法

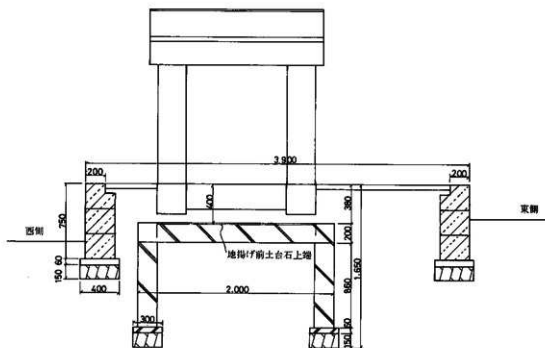
根切りの後、地均しを行い割栗石を巾三〇cm、厚一五cmに小羽立とし、目潰し砂利を馴染み、納で充分締め固め、その上に厚六cmの捨てコンを打つ。布基礎・スラブ共工場製作。布基礎は周囲に假神を組み主筋を上・下、中央に補助筋を入れ、スターラップ二〇cm間隔に配る。スラブはタテ・ヨコ十五cm間隔にダブル配筋し、中央前寄りに一八cm角の孔を明け周囲に斜筋をダブルに配筋し、生コンクリートを流し込み養生を施し二週間放置した。假神を取外した布基礎とスラブは現場へ所定の位置、高さに据えた。



第3図 基礎配筋図



第4図 基礎平面図



第5図 基礎断面図

G 補修組積工事

① 材料及び工法

① 明治

② 弘安六年

区	分	在		の		工		法		実	
		材	工	時	材	材	工	工	工	工	
床	石花崗岩	下層以外ノミ切 仕上げ、空積み									銅石、生コン根巻き
土台	石花崗岩	下層以外ノミ切 仕上げ、空積み		②							同右
壁	石花崗岩	全面ノミ切仕上 げ、空積み									在来の工法通り
屋根石後	花崗岩	全面ノミ切仕上 げ、空積み									在来の工法通り 切斷箇所はステンレス筋 挿入補修にて接合、上端 凹部は鑿石充填
屋根石前	花崗岩	全面ノミ切仕上 げ、空積み									在来の工法通り 亀裂部ステンレス鋼補強
欄	花崗岩	全面ノミ切仕上 げ、空積み									在来の工法通り 切斷箇所にて接合 挿入補修にて接合

全員数再用

石材表面にはSS一〇一を散布し、亀裂部は充分注入した。

欠損部は整形しなかつた。

屋根石(後)上端凹部の整形は、水が溜る状態であり凍害を避けるため上端に水垂れ勾配が付く程度に鑿石整形。

② 補修材料(調査は重量比)

防水剤 主剤 SS一〇一
硬化剤 触媒

接着剤 アラルグイトCY三〇〇

硬化剤 エポメイトB〇〇二

増粘剤 エロジール、ガラスマイクロパールン

充填剤 カープレックス

ステンレス鋼 SUS三〇四 径一三mm 錠

鑿石、石花崗岩、石粉、同前接着剤

③ 調査比(重量比)

防水剤 SS一〇一 1kg

触媒 3%

接着剤

ステンレス筋充填用 アラルグイトCY三〇〇 二〇〇g

エポメイトB〇〇二 八〇g

カープレックス 一〇〇g

アラルグイトCY三〇〇 一〇〇g

エポメイトB〇〇二 四〇g

エロジール 一〇g

アラルグイトCY三〇〇 一〇〇〇g

エポメイトB〇〇二 四〇〇g

エロジール 一五〇g

カープレックス 三五〇g

ガラスマイクロパールン 二〇〇g

④ 調査法

防水剤は前記調査比で配合したものを散布し、よく乾燥させた。

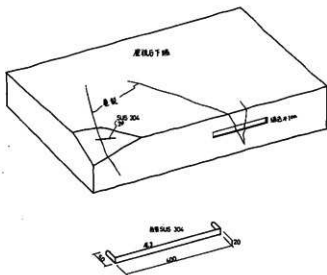
接着剤は約七〇度の湯煎にCY三〇〇を入れ(高温になると粘性がなくなり混合しやすくなる)これにエロジール・カープレックスをかく押しならよ

く混練し、「無添加樹脂」を作成し、次に「無添加樹脂」をかく拌しながらB
 ○○二を徐々に注ぎ込む。この樹脂にさらに用途によりガラスマイクロバル
 ーンを適量配合した。

⑤ 施 工

クリーニングを行い接着前に石材全表面に防水剤SS一〇一を散布し、特に
 亀裂部には充分流し込み表面に湧き出るよう注入し、溢れ出したSS一〇一が石
 材凹部に溜った時は「トルエン」で拭き取った（拭き取らないと乾燥後光沢
 が出来てしまう）。

亀裂部の補強はステンレス鋼錠を石材に掘り込み、掘り込み部に前記接着
 剤（充填用）を充填した。



第6図 錠補強図

接合面にステンレス筋を入れる孔を二箇所づつ明け、片方の孔に充填用接
 着剤を充填し、ステンレス筋を入れて乾燥させ、樹脂硬化後、塗布用接着剤
 をワイヤーブラシで塗布し（表面を濡らす）、次に接着用接着剤を両面に盛り
 付けて圧接した。

⑥ 粗 積
 擬石調合は前記接着剤（塗布用）を屋根石凹部に充填し、石片・石粒を埋
 め込み乾燥後、ノミ仕上げを行い周囲との調和を行った。

⑦ 石 室
 コンクリートスラブの上に栗石を削り込み、生コンで根巻き、旧
 位置に不陸傾斜のないよう床石・土台石を上端水平に据え付けた。
 壁石は空積みとし、同頂部で再度水平をとり、屋根石・棟石を据え
 付けた。

⑧ 五輪塔 石室組積後、石室床石面の旧位置に据えた。
 H 雑 工 事

① 修理銘板

厚二・五mm×巾二〇cm×長四九cmの銅板に文字を陰刻し、防錆塗を施した
 後、石室内後壁に立掛けた。

② 跡片付・清掃

諸工事を完了後仮設物を撤去し、工事区域の整地・清掃を行い、借用地の山
 土敷を撤去清掃し、旧状に復旧した。

③ 附帯工事

④ 種 類

周囲保護柵復旧、基礎石花崗岩二段積み。

⑤ 設置理由

石室周囲には現在危害防止の保護柵があるが、設置後の経年による腐蝕で
 鉄柵は取り替えを要する時期となってきた。今回の工事に支障するため一時

取外すので、これを機会に取替えた。

③ 材 料

ステンレス鋼 SUS三〇四つや消

柱	四六〇×四六〇×一・五
枠	三〇〇×三〇〇×三〇
丸棒	径九〇
帯鋼	二五〇×六

基礎 石 花崗岩(支給品)

コンクリート

Fc 二〇〇kg/cm²

栗 石 五〇〇×一五〇

④ 工 法

巾四〇cmに所定の深さまで根切り後、栗石を巾四〇cm×厚一五cmに敷き、ランマー搗き固め後、捨コンを厚六cm打ち込み基礎石を敷設した。柵はステンレス品を加工して組み立て、基礎石の四隅に穴を穿ち、柱を差し込んだ。扉は両開き扉錠付とし、石室正面に正対させて設置した。なお、柵内に一旦取外した砂利は石材保存場内に袋詰めにして保管、盛土後元通りに敷均した。

二、工 事 事 務

A 工事運営の基準

文化財保護法・補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律及び同法施行令・文部省令・文化庁規則・飯田市工事請負契約等を参照して事業を運営した。

B 工事組織

重要文化財文永寺石室・五輪塔保存修理工事委員会を組織し、設計監理は財団法人文化建造物保存技術協会に委託し、工事は請負工事として実施した。

C 貯 手

昭和六一年七月一日に着手し、着工届を文化庁に提出した。

D 労工準備

① 工事区域を設定し、就業規則、その他の工事に必要な規則を作成して実施した。

② 工事工程とこれに関連する支払い計画を作成して実施した。

E 帳 簿

現金出納簿・予算索引簿・工事工程表・工事日誌その他を備え、詳細かつ正確に記入した。

F 記録作成

① 調 査

破損・仕様・痕跡資料・構成部材の調査を作成した。

② 図 面

修理前・後、その他施工図・詳細図を作成した。修理前・後の図面は二枚とし、図面はケント紙に製図し、墨入れ仕上げとした(タテ六八cm、ヨコ九八・五cm、紙辺より枠内縁まで四・五cm入り巾二・五cmのタテ・ヨコ枠を組む)。

③ 写真撮影

修理前・後及び工事中に必要な記録写真を撮影した(修理後はカビネ判、修理前及び工事中はライカ判)。

G 工程報告

工事の進行状況は、定められた書式による工程月報及び工事監督報告を作成し、前者は写真添付のうえ翌月五日以内に、後者は臨場の都度文化庁に提出した。

H 現状変更

旧規の判明したもの及びその他の事由により現状の変更は、要旨・説明・図

面・写真等の資料を添付して文化庁に申請し、昭和六一年二月一日付委保第四号で許可を得た。

一 実施計画・計画変更

解体工事が完了し、現状変更の許可を得て工事方針の詳細が判明したので実施計画を作成及び現状変更により工事費の増並びに経費配分の変更・仕様の変更が生じたので計画変更承認申請書を作成して文化庁に申請し、昭和六二年二月一日付委保第七号をもって許可を得た。

J 修理結核

工事完了後、工事の概要を銅板に陰刻し、防錆塗を施した後、石室内後壁に立掛けた。

K 修理工事報告書

竣工後、工事の概要・各調査結果を編集し、前記諸記録を併載した修理工事報告書三〇〇部を刊行した。図版及び写真はコロタイプ印刷とし、配布は普及活用の適正化を計るため文化庁と協議して決めた。

L 竣工

工事完了の際は工事の経過及び結果を記載した実績報告書に精算書・実施仕様書・図面の写しと工事工程の判る写真・修理工事報告書とその他資料を添付して竣工後一〇日以内に長野県教育委員会に提出した。また修理前・後の図面原図・写真(目録添付、竣工のうち主要部はハッ切)その他資料を実績報告精算書の写しと共に文化庁建造物課に提出した。

第三節 工事費(単年度)

一、収 入

区 分	総 額	備 考
国庫補助額	一六、〇〇〇円	七五%
長野県補助額	一、〇〇〇円	十二・二五%
飯田市補助額	六六〇円	七・五%
所有者負担額	四四〇〇円	五%
総 額	八、八〇〇円	

二、支 出

区 分	員 数	単 価	金 額
総 事 業 費			八、八〇〇、〇〇〇円
修 理 工 事 費			四、六一〇、〇〇〇円
本 工 事 費			三、二二〇、〇〇〇円
発 掘 調 査 委託料			二、六四〇、〇〇〇円
土 地 使 用 料			六、〇〇〇円
工 事 諸 負 費			二、九四〇、〇〇〇円
飯 設 工 事	一式	八〇、〇五〇円	
水 盛 立 工	一式	二、五四〇円	
工 材 保 存 場 屋 形	二、五〇〇棟	二、九七〇円	
便 材 小 庫	一、〇三三棟	二、二五〇円	
監 理 事 務 所	七、九〇〇棟	二、四七〇円	
境 界 設 備	一、八〇〇棟	一、〇〇〇円	
諸 費	二、八〇〇棟	二、五三三、三五〇円	
調 査 工 事	三、三〇〇棟	二、七〇〇円	
石 器 損 失	三、三〇〇棟	二、七〇〇円	
石 器 損 失	三、三〇〇棟	二、七〇〇円	
普 通 作 業 員 工 料 材	四、八〇〇人	七、五〇〇円	
解 体 資 材 事	一、〇〇〇人	四、〇〇〇円	
解 体 資 材 事	一、〇〇〇人	三、八〇〇円	

第三章 調査

第一節 破損状況

一、石室

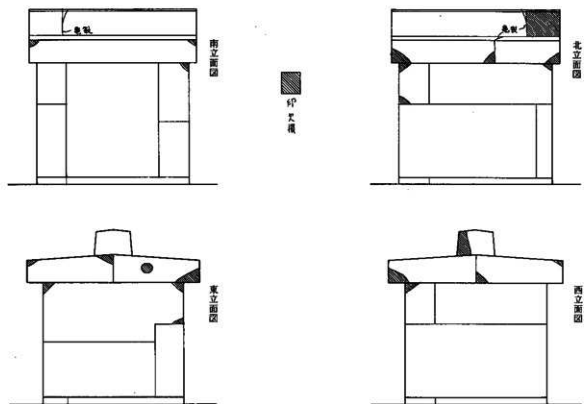
軟弱地盤のため正面が約一三cm沈下し、これに伴い土台石・壁石のゆるみ、屋根石の入り出しがみられた。地盤は表面が厚さ約一〇cmの盛土、この下約一mが泥層、さらにこの下は礫層となっていた。泥層は地耐力があまりない上に周開が水田であるために夏期は地下水位が上昇し、泥層の中間位まで水位が上っていた。

石材表面は経年による風化、カビの発生、後方（北面）屋根石上端に苔が密生、隅部欠失、屋根石・棟石の欠折があった。

土台石は正面と背面が外方に四〇cm程づれ、正面土台石は右端が壁石の荷重が掛り左端が跳ね上り、また上端は子供達の遊びの悪戯による摺鉢状の窪みが多数みられた。正面土台石を除く三方の土台石は平均に正面寄りにながっていた。左側（西面）北寄り上端に亀裂が入っていた。

中央敷石は右下（東南）から左上（西北）斜めに向って亀裂が、また正面見付に半円の亀裂が入っていた。

壁石は全般に隅部の欠失が目立った。土台石の沈下に伴い壁石も全体に正面に傾斜し石の合羽は口があいていた。また内外共表面はカビが発生し、背面壁石の外側は苔が生えていた。



第7図 石室破損図

屋根石は水垂れ勾配も少なく凍害の被害が多くみられ、上端の凹及び層状剝離、また凹部に雨水が溜まることにより苔の密生がみられた。正面(南面)屋根石は下端中央前より右後方に向けて厚みの半分位に亀裂が入っていた。背面(北面)屋根石は中央で南北に二つに割れていた。また表面全体が風化による剝落が目立ち、特に正面屋根石下端の刻銘文は外部に近い方が判読しにくい状態になっていた。

機石は向って左端(西端)より約四〇cm東の位置で欠損し、折れた短い方の背面側が欠失していた。

二、五 輪 塔

五輪塔は石室内部に安置してあるため比較的保存良好であるが、外部に面する正面(南面)側が石室に比べると少ないがやや風化している。

五輪塔は石室の敷石の上に載せており、この敷石へは石室壁石の荷重がかからず敷石は略水平であったため五輪塔への被害はなかった。ただし火輪笠出隅に欠失箇所があった。空輪頂部は欠損していたが、これは故意によるものとみられる。石室天井高さは一・二mあり、五輪塔総高は一・一六七mあつて風輪下端の太柄成イが約四〇cmで、これを組み立てる際に風輪下端の太柄分だけ上げなくては火輪上端の太柄穴に納まらないことになって、現状の空輪頂部が欠失した状態で辛うじて納まることになる。

空輪頂部の欠失した寸法が判明出来ないが、推定で少なくとも二一三cmは高くなると思われる。石室に納めようとした時、風・空輪を石室内で組み立てようとした時に空輪の頂部が石室の天井に当つてしまい納まることが出来なかつたので、やむを得ず空輪の頂部を欠き落して納めたものと想像できる。

第二節 現 状 変 更

今回の修理を機に後世の変更箇所を旧規に復することとし、次に記す現状変更許可申請書を文化庁に提出し、許可を得て施工した。

一、石 室

約四〇センチメートル地上げした。

石室は四周に土台石を廻し、その内部に一枚の床石を置き、正面(南)を除く三方を石壁で囲い切妻形の板石をのせ機石を上げる。床石には中央やや前寄りに四角の孔を穿ち、この直下に骨蔵器を納めることが解体の結果判明した(注一)。土台石・床石下は地盤が陥されず、かつ地盤が軟弱であるため全体に沈下し(注二)、このため骨蔵器上半部が破損していた。骨蔵器、納入品は修理後も原位置に納めることから、組立にあつて石室を約四〇センチメートル地上げした。

骨蔵器は一旦取り出し、破損部を接着修理して原位置に復した。このため石室の荷重が直接骨蔵器にかからぬよう、周囲に布基礎を通してコンクリートスラブを作つて石室を支持することとした。

二、五 輪 塔

約一三センチメートル後方に移動させた。

五輪塔も石室と同じく花崗岩製で、四方に種子を刻む。現在は石室の中央に安置され、石室床石の孔は地輪の下に隠れる。床石の孔には前半に石室を嵌めたとみられる腰掛があることや(注三)、床石表面には現在の五輪塔中心より一三センチメートル後方に心皿が縦横に残つており、この心皿に対応する地輪の掘え付痕も僅かながら検出されることから(注四)、五輪塔は石室床石孔の石室の後方に位置していたと推定されるので、約一三センチメー

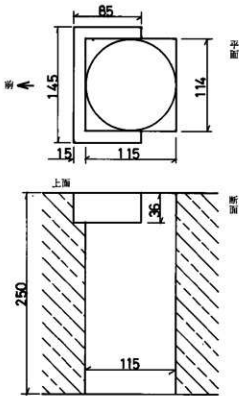
トル後方の旧位置に戻して石蓋をあらわした。

(注一) 床下真下に深さ〇・六五メートル、最大径〇・六九七メートルの蓄積槽の骨
 蓋が納められ、中には人骨が六分目程入れられ、その他末鏡二七枚、古瀬戸
 鉄輪小蓋、土師器小皿、鉄片二、小玉一箇が混入していた。人骨は複数のも
 の末鏡は一―二世紀初めのものである。小蓋は一―五世紀頃のものとして推定され
 る。

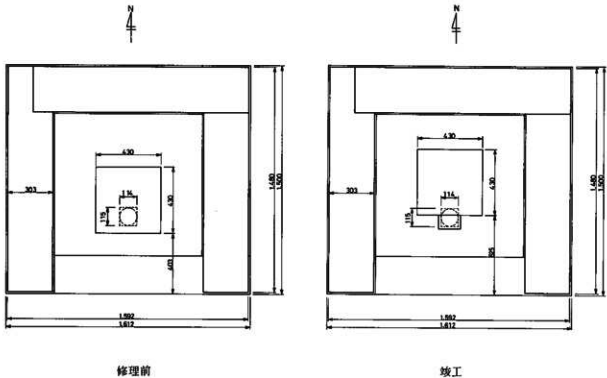
(注二) 地盤は泥土が三層程あり、地表一メートル下で礫層に達する。石蓋は正面の
 沈下が最大で、約一三センチメートル背面より低い。

(注三) 孔は平面凸形に穿たれ、下手は丸孔となつて貫通している。孔の各寸法は左
 図の通りである。

(注四) 五輪塔は現在正面土台石前面から石蓋後壁までの中央に位置する。心礎は現
 在の中心より一三センチメートル後方にある。この位置に復すると、地輪前面
 が石蓋の後縁に一致する。



第8図 敷石



第9図 平面図

第三節 形式技法

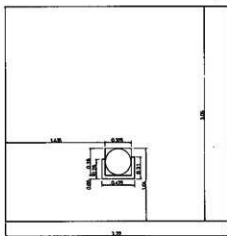
一、石 室

(この項は総て「尺」を用いた)

平面は間口五・二五五尺(壁石外々寸法)、奥行四・八八五尺(壁石外々寸法)、これに土台石の敷り寸法を各面 \bigcirc ・ \bigcirc 三二五尺とつた正方形に近い平面をもつ内部は間口三・二五五尺(壁石内々寸法)、奥行三・八八五尺(壁石内々寸法)とする。天井高は三・九六尺、軒の出は正面 \bigcirc ・八寸、背面 \bigcirc ・三二五尺とし、屋根石上端は \bigcirc ・六六強の水垂勾配を付ける。横木は上端鑄付き。

A、土台石・敷石

敷石の大きさは間口三・二二尺、奥行三・ \bigcirc 五尺、厚さ平均 \bigcirc ・八五尺、上端と側面(土台石との合羽)はノミ切仕上げ、上端中央寄りに通納するための孔が穿たれ上半角孔、下半丸孔となつて貫通している。



第10図 敷石

土台石は敷石を囲むように各面左側突き付けとして配列する。土台石の上端・内側面(敷石との合羽)はノミ切仕上げ、外側面は西面土台石が上端から \bigcirc ・二尺下りを、他の三面土台石は \bigcirc ・三尺下りをそれぞれノミ切仕上げとしている。

B、壁 石

壁石は各面二段積みにし、積み方は一段目は土台石に空積みとし、向つて左面(西面)後端の壁石は相欠きに欠き込み、背面(北面)壁石は西面後端壁石相欠部に突き付け、向つて右面(東面)壁石は背面壁石東端に突き付けとなるよう組立て、西・背面壁石の高さは二・五二尺に控え、東面はこれより \bigcirc ・六二尺低い高さ一・九尺の壁石を使用。二段目壁石は一段目壁石の上端に空積みとし合羽は「」門のように周辺のみが当るように中央部を護めている。西面後端部は相欠きとせず単に突き付け、東面後端部も突き付けとするが、一段目壁石高さに段違いが生じているため東面二段目壁石の後端下地を相欠きに欠き取つて積み上げている。二段目壁石上端は水平になつてこれに屋根石を載せる。

C、屋 椽 石

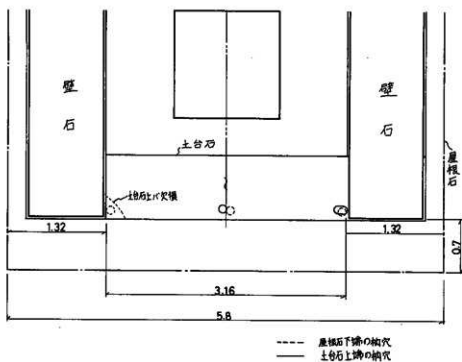
屋根石は前(南)・後(北)二枚で構成され、上端約 \bigcirc ・六六勾配の水垂勾配付、前・後屋根石奥行は前で二・ \bigcirc 四尺、後で三尺あり前の方が若干大きい。後屋根石軒付は風化が著しいため元来は前・後同じであつたと考えられる。間口広さ五・八尺、軒付厚さ \bigcirc ・八尺、押み厚さ一尺。

D、棟 石

長さは屋根石間口広さと同じ五・八尺とし、断面は上端鑄付きの台形とし下端は屋根石水垂勾配に加工している。見付成寸 \bigcirc ・八三尺、鑄高 \bigcirc ・ \bigcirc 四尺、上巾一・二尺、下巾一・三三三尺、両端木口は屋根石クラブと同様に垂直に加工している。

E、石室 痕跡

石室正面（南面）の開放部には結界装置の痕跡があるが、当初からのものか後世のものかは判然としない。また太柵穴の細工をみると掘り方が雑であつて、当初からとすれば組み上つてからの細工であらう。正面土台石上端とこれに対応する屋根石下端に太柵穴が穿たれている。



第11図 土台石・屋根石の軸摺穴痕跡

結界装置はおそらく扉のようなものであつたと思われるが、木製か石製かは不明である。そして太柵穴は扉を吊り込むための軸摺穴とみられる。正面土台石上端の正面向つて右端（東端）と中央及び屋根石下端の正面向つて左右端と中央にそれぞれ太柵穴が穿たれている。なお土台石左端にも太柵穴があつたと思われるが、現状はこの箇所が欠失している。また中央の上下対応する太柵穴は中央を振り分けとして左右にずれている。

二、五 輪 塔

風・空輪は一石造り、地・水・火輪は別造りである。風輪頂部は欠失している（第三章第一節二項五輪塔参考）。

A、地 輪

一辺一・四二尺、高〇・九一尺、上端太柵穴。

B、水 輪

下端径〇・七二尺、最大径一・三三尺、上端径〇・八五尺、高〇・九六尺上、下端太柵造り出し。

C、火 輪

一辺一・三五尺、軒付厚（平・隅共）〇・三三尺、軒付下端の反り元は端より内側に〇・四尺入つた点、軒付上端は真反りとして軒付投げは垂直で、上端一辺〇・五六尺、高〇・八八尺・上・下端太柵穴。

D、風・空 輪

一石造り。風輪下端径〇・五尺、上端径〇・九五尺、高〇・四二尺、下端太柵造り出し。空輪下端径〇・六五尺、最大径〇・八五尺、高〇・六八尺（頂部欠失の状態）。

五輪塔は密教に於いて胎藏大日如来の三昧耶形とされているものであるが、各家を通じて用いられるようになった塔形であり、この塔は宇宙はすべて五大

からなるとする思想から『五大姿、五智相を表現して上から空・風・火・水・地の各輪から構成されている。』地は「万物を生じ万物を成就し、水は物の体を変えずして平等に一切をうるおし、火は異類の物を焼きて悉く一相の灰となし、風は三千六千世界の物所なり、大円鏡智は輪円具足一大法界の惣所に依る姿なり、空は際限なき故に法界性智の周遍法界の性にして更に分齊なきが如く也」と『醍醐惠瑞著八緒』に説かれている。従つて各輪の上から第一章第一節二項に記したよう「キャ・カ・ラ・バ・ア」の五大種子の四門を薬研形で次のように刻んでいるものである。

東方発心門　キャ・カ・ラ・バ・ア

南方修業門　キャー・カー・ラー・バー・アー

西方菩提門　キャン・カン・ラン・パン・アン

北方涅槃門　キャク・カク・ラク・バク・アク

文永寺五輪塔に於いても一方位がずれ南面を東方発心門とし前記と同様字体が四方に薬研形となっている。

第四節 類似調査

一、石　室

石造物の内室・龕・調の類は件数が少ない方であつて、文化財に指定されているものには左記がある。

仏隆寺石室（平安時代）　奈良県宇陀郡樺原町大字赤塚

十輪院石仏龕（鎌・前期）　同　奈良市十輪院町

文永寺石室（鎌・弘安六）　長野県飯田市下久堅茂

岩船寺石室（鎌・応長二）　京都府相楽郡加茂町大字岩船

守福寺室殿（室・暦応元）　岡山県岡山市下足守

以上五件が指定物件であるがこの他に指定外として、古法華三尊石仏龕（奈良時代、兵庫県加西市古法華）、十二所権現石殿（室町時代、奈良県宇陀郡樺原町松ノ牧）、福住別所二尊石仏龕（室町時代、奈良県天理市福住別所）、高貴寺十王石殿（室町時代、大分県豊後高田市）、両羽神社石造龕（鎌倉時代、長野県北佐久郡北御牧村）、信貴山十三仏石龕（室町時代、奈良県生駒郡平群町信貴畑）、高野山・徳川秀康及び同生母長勝院石厨二棟（桃山時代、和歌山県伊都郡高野町）、庵寺跡墓地石殿（桃山時代、京都府福知山市上和市）、隆崇院石室千佛仏江戸時代、岐阜県恵那郡岩村町）等が挙げられる。

A、仏隆寺石室

内牧谷と室生を結ぶ径路にあたり、真言宗室生寺の末寺として嘉祥三年（八五〇）空海の高弟堅惠が興興難を壞王に創建した。また、一説にはそれより先、興福寺の別当修円が開基したとも伝えられる。

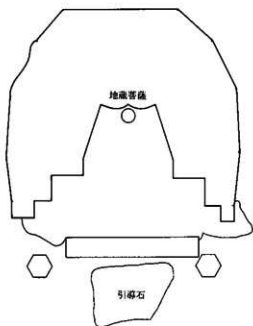
狭道と玄室を設けた本体は古墳の内部構造を地上にあらわしたような構成になり、入口両側に袖石垣を付し、主体部の上に玉石を積んで宝形造の屋根を造り、露盤を載せる。

B、十輪院石仏龕

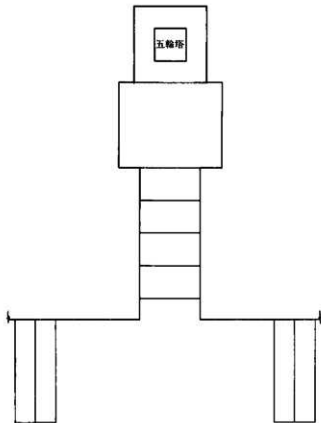
十輪院は興福寺の門前に拡がる旧奈良町の中央やや南寄りにあつて、古い家並みとよく調和して静かな佇まいをみせている。

寺伝によると当院は天正天皇（七一五―七二四）の頼願寺にして元興寺の一子院、右大臣吉備真備の長男朝野宿禰魚養の建立という。その後弘仁年間（八一〇―八二二）弘法大師が留錫され、本尊石造菩薩を造立させたこととある。『地蔵十輪経』より十輪院と名づけられている。

道路に面して南門と築地塼を廻らし、南門を潜ると本堂があり、この本堂の裏に石仏龕が安置されている。



第13図 十輪院石仏龕平面図



第12図 仏隆寺石室平面図

この石仏龕は他の室・龕に比べて工芸的な美しさでは群を抜いて素晴らしい石造物である。総て花崗岩の切石を用いて築造され、中央奥壁の本尊地藏菩薩立像は右手と願印、左手宝珠の古式像で厚肉彫りである。その左右には十王、天女が線刻され、地藏菩薩の脇侍として釈迦如来と弥勒菩薩が半肉彫りされている。釈迦は過去仏、弥勒は未来仏、その中間の世界にあつて衆生を濟度するものが地藏菩薩である。その他仁王、四天王、不動明王、聖観音や多数の五輪塔が線刻、薄肉彫りされている。観音、勢至の種子、七星、九曜、十二宮、二十八宿を梵字で陰刻し、星曼荼羅風に構成されて、地藏十王信仰と巧みに組合わされている。中央正面の引導石は身骨を其の上に置き釈迦・弥勒・中間の大導師地藏菩薩に引換を乞ひ願つたといわれる。諸仏の視線は総て引導石の上に置かれる身骨に注がれるよう彫られている。龕前面左右に立つ六角の石柱は「金光明最勝王経序品第一」と「妙法蓮華経序品第一」の品名を刻んだ柱礎。

C. 岩船寺石室

岩船寺は真言律宗の古刹である。岩船寺は浄瑠璃寺と直線距離一・二回余で、南山城の山の中にある。

創立は、聖武天皇天平元年に始められ、僧行基により阿弥陀堂を建立後七十八年を経て弘法、智泉南大師此の堂に於て伝法を行つてより灌頂堂となり、智泉あらたに報恩院を建立した。弘仁四年皇極假借深く堂塔を建立、岩船寺という。当時寺塔三十九坊あり境内四城十六町の広きであつたが承久三年（一二二一）兵火に罹り焼火、岩船寺のみ兵火よりまぬがれたが、応長の頃に再度兵火にかかり堂宇も過半焼失資運に向つたが、寛永年中徳川氏の寄進により修造し現在に至る。

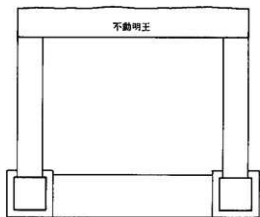
石室は境内の東側の斜面に接して西を向いて建つ花崗岩製の石造物である。なおこの石室の北・南側には五輪塔・十三重塔が建っている。寺仏によると湯屋坊盛現が眼病平癒の恩に報わるため、不動尊像を彫刻して安置したという。

また入滅の際「我が後生の風俗にて眼病に苦しむ者あれば必ず岩船寺不動明王を祈願成就する」と申された。

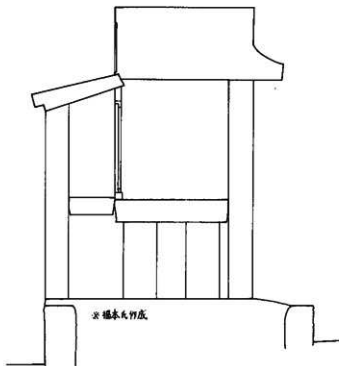
正・側面三方は土台石を施し、正面両端に四角い柱石を建てその間は開放とし、両側面下半部は壁石を嵌め込み、背面は一枚の壁石を建て込んでいる。柱石と背面壁石の上に屋根石を載せ、屋根は勾配の緩い香棟造とし、軒を反らせ、棟は雁振瓦を伏せた形の棟を造り出す。内部床面は地盤面より低くして、清水を流している。背面壁石内面には、本尊の不動明王立像を浮彫りとする。

D、守福寺宝殿

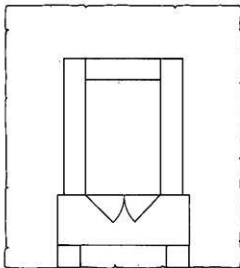
守福寺は備中高松より北に約四回の下足守の東部に位置する。境内は南面し、三門を潜り正面奥に本堂が建ち、三門東脇に宝殿が西面して建つ石造物である。本来は現位置の東側の真山に所在していたとのことであり、京都神護寺所蔵の「足守莊園図」には守福寺背後の山腹に王子堂と書かれた祠が画かれ、これが宝殿の前身であったと考えられている。



第14図 岩船寺石室平面図



第16図 守福寺宝殿断面図



第15図 守福寺宝殿平面図

形式は縁廻りのない春日造りといえよう。背・側面を壁石で囲い、向拝石柱と身舎間に床石を据え、身舎内部も約同高の床石敷となつてゐる。屋根石は向拝と身舎を別石で造り、向拝軒は槿型を造り出さずに二軒で上端反り付き、身舎軒も槿型を造り出さない上端反り付きの二軒、身舎屋根正面は照り破風を造り造した切妻造り、背面は寄棟造りとし棟は馬蹄型に造り出している。

身舎正面の現状は木製開き板戸建てであり後補のものであるが、元々結界装置はあつたものとみえる。

E、高羽神社石造倉(長野県宝、鎌・正慶二年?)

台座をもつ竿の上に鍔葺屋根の宮殿を安置したもので、安山岩葺製。台座は方形で凸状に造り出す。竿も方形縦長で下端に縁をとり、正面に鶴亀の線彫り、他の三面には樹幹の薄肉彫りと線刻の開花・青葉・結実の絵様が彫刻されている。宮殿は単層、下部(中台)は薄肉彫り勾欄型をあらわした廻縁をまわし、正面中央に階段付入口を設け、その両側には薄肉彫りの左右相對した狛犬を刻み、他の三面にも中央に階段付入口を設けその各左右に蓮子形を刻む。屋根は鍔葺で大棟の両端に鴟尾をあげ、屋だるみをつけ、軒は二軒真反りにして無形を刻み、妻は照り破風にし坪み下に懸魚を線刻し、大棟中央正面に紋を刻み、屋根面は枳莖を表わした段状を線刻する。

銘記は、前略「三月廿八日癸酉歲時正慶二」後略、とあるが字体とその彫り様から後世の追記とみられる。なお信濃寺区一覽(天保五年、井出道貞著)に近年(天保の頃か)本殿後の老松の下の土中に埋れていたのを掘り出した旨を記しているので、神祠として造立したものであることを知るほか、詳細については不明である。

F、磯崎院石室千体仏(岩村町史跡、江・寛永九年)

岩村町は中央道恵那ICから東南へ直線距離で二二㎞入つた山中で、町の東方標高七二一mには岩村城跡を有する。

石室千体仏は町の西方字一色の丘上に南面して建つ。現在は鉄骨組屋根に保護されているが元々は野晒しであつた。

石室千体仏は、寛永九年に岩村城主松平乗寿が岩村城の鎮護と領地の住民の安寧繁栄を祈願して創立したもので、松平乗寿は菩提寺であつた龍巖寺に命じて浄土の三経一千部を石室に薦め、地中に埋藏してその上に石室を設け、千体の阿弥陀像を安置した。その後寛永一五年松平乗寿は国替えによつて浜松に移つて、丹羽氏五代約七十年が岩村城主となつたが元禄一五お家騒動が原因で領地半減となつて越後高柳へ所替えとなつた。丹羽氏時代に石室千体仏が打ち壊れてきたが、後の城主として信州小諸から松平乗紀が入城した。乗紀の子の乗賢は名君といわれ、石室千体仏を建立した松平乗寿の曾孫でもある。その乗賢が荒廃を嘆き、寛保元年にこれを再修した。

石室を改修すると共に仏像も新しく作り替え、石工は和泉國の森長兵衛、仏工は京都の若林八郎兵衛であつた。

仏像の中尊像は一体で大ききは身長一・四尺、座光共に三尺六寸、千体の小像は身長〇・三尺で総て木彫りで金箔を押ししたものである。

この石室は「文永寺石室」と同様な岡岩製切石で構築し、切妻造平入りである。近年盗難にあい開口部を切石で塞いじまつた。

棟石中央に上端鑄取りした四角い石を置き、四面に種子のキリクを刻む。石室内外面に刻まれた銘文の一部を記載。

大檀主

從四位下行鎮倉侍從左近將監源朝臣粟色
從四位下行岩村侍從兼能登子源朝兼賢

南無阿弥陀仏

美濃州岩村城一色の千体仏再栄の記

以下略。

寛保元年辛酉夏四月十日

第五節 参考資料

一、石造物

1、重要文化財に指定されている石室、仏龕、門表（石造建築は左に掲示する十棟である）。

指定	名称	構造形式	所在地並に所有者	年代
昭48	東照宮神社 文永寺	石造一間平唐門	栃木県日光市内 東照宮	江戸 寛永十六
昭5	文永寺 石室	石造石室切妻造入	長野県飯田市 文永寺	鎌倉 弘安六年(刻銘)
昭27	岩船寺 石室	石造石龕(香楼造)	京都府相楽郡加茂町 岩船寺	鎌倉 応長二年(刻銘)
大14	十輪院 石龕	石造石龕	奈良県奈良市 十輪院	鎌倉前期
大3	仏隆寺 石室	石造宝形造	奈良県宇陀郡原町 仏隆寺	平安
昭40	松平秀康墓 母墓屋	石造行三間、梁間三間入母屋造 石造行二間、梁間二間切妻造 妻入	和歌山県伊都郡高野町 野山 蓮華院	桃山 慶長九年(刻銘)
昭36	守福寺 石室	石造切妻造、妻入、向拝一間	岡山県岡山市 守福寺	室町 暦応元年(刻銘)
昭47	關比羅武藏 石門	石造一間平唐門	沖縄県那覇市 那覇市	室町 永正十六年
昭47	旧崇光寺第一 門及び石龕	石造三連アーチ門、左右石龕	沖縄県那覇市 沖縄商館	室町 文明年

右記の内石室類は五件である(ゴシック体)。

注 弘安六年は文永元年(二六四)より一九年後となる(文永は一年続き、その後建治

が二年で弘安となる)。

2、重要文化財に指定されている五輪塔表(左記五〇基礎である。長野県では、石造物件として文永寺の石室と五輪塔の組合せたもの一基であり他に石造物件としては常楽寺石造多宝塔一基(鎌倉・上田市別所)と白田町六地藏一基(室町永享十二年)があるのみである)。

指定	名称	構造形式	所在地並に所有者	年代
昭29	歌野院(中 寺)五輪塔	石造五輪塔	岩手県西磐井郡平泉町 歌野院	平安 仁安四年
昭13	五川村 五輪塔	同右	福島県五川郡五川村大字 五川村	平安
昭9	極楽寺 忍性一塔	同右	神奈川県鎌倉市極楽寺 極楽寺	鎌倉後期
昭28	極楽寺 五輪塔	同右	同右	鎌倉 延享三(刻銘)
昭13	浄光明寺 五輪塔	同右	神奈川県鎌倉市扇ヶ谷 浄光明寺	鎌倉 嘉元四年 (香楼表刻銘)
昭28	東徳寺(香 楼)五輪塔	同右	茨城県水戸市 東徳寺	鎌倉 乾元二年(刻銘)
昭28	箱五輪塔	同右	茨城県水戸市 足利郡箱五輪町	鎌倉 永仁三年(刻銘)
昭28	箱五輪塔	同右	石川県加賀市山代町山代 箱五輪院	室町初期
昭32	葉王輪塔	同右	長野県飯田市 葉王寺	鎌倉 弘安六年(刻銘)
昭5	文永寺 五輪塔	同右	長野県飯田市 文永寺	鎌倉 弘安六年(刻銘)
昭35	石塔 五輪塔	同右	徳島県徳島市 石塔寺	鎌倉 嘉元二年
昭30	安楽院 五輪塔	同右	京都府京都市伏見区竹田 安楽院	鎌倉 貞和五年(刻銘)
昭32	石清水八幡 五輪塔	同右	京都府京都市伏見区竹田 石清水八幡宮	鎌倉後期
昭32	泉橋寺 五輪塔	同右	相模野山郡町大字 泉橋寺	鎌倉後期
昭32	水津町塔	同右	山梨県北杜市 水津町小字	鎌倉 正応五年(刻銘)

3、尚不断関係なく使用していないため字者以外一般に梵字の読方が配布されていないため石造研究の一部の人の読取り助けになるため梵字の五十音読取り表と、主な梵字の内容解説表を次に掲示参考資料としておいた。

昭29	昭36	昭29	昭27	昭40	昭32	昭36	昭36	昭19	昭32	昭36	昭30	昭28	昭27	昭31
野津町八里合五輪塔	臼井市中尾五輪塔	兼光寺五輪塔	野間部五輪塔	石手寺五輪塔	松平秀康母屋五輪塔	香芝町鎌田五輪塔	室生寺五輪塔	額安寺五輪塔	大和郡山五輪塔	円成寺五輪塔	円成寺五輪塔	東大寺五輪塔	一乗寺五輪塔	岩船寺五輪塔
同右	同右	同右	同右	同右	同右	石造五輪塔	石造五輪塔	同右	同右	同右	同右	同右	同右	石造五輪塔
一基	一基	四基	三基	一基	一基	一基	一基	八基	一基	一基	一基	一基	一基	二基
八里合	大井郡野津町大字吉田文明	大分県臼井市大字中尾野中正統	今津市野間	愛媛県松山市石手	和歌山県伊都郡高野町高野院	宇治郡北島郡当麻町大字	宇治郡室生寺	宇治郡額安寺	大和郡山五輪塔	奈良市花守山町円成寺	奈良市林小路町円成寺	奈良県奈良市輪町東大寺	兵庫県加西市坂本町一乗寺	岩船寺
鎌倉弘安八年(刻銘)	鎌倉	平安享徳二年(刻銘)	鎌倉	鎌倉	江戸元禄五年(刻銘)	平安後期	室町前期	鎌倉永仁五年(刻銘)	桃山天正十二(刻銘)	鎌倉元享元年(刻銘)	鎌倉天文一九(刻銘)	鎌倉前期	鎌倉元享元年(刻銘)	鎌倉

カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク
カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク	カ	ク	コ	ケ	ク

五十音梵字附表

主な梵字の内容解説表

水天 スイテン	羅刹天 ラクシャツテン	閻魔天 エンマテン	火天 カテン	帝釈天 テイクツテン	伊舎那 イシャナ	大黒天 ダイコクテン	歡喜天 カンギテン	辨才天 ベンサイテン	吉祥天 キョウジヤウテン	多聞天 タモンテン	增長天 ゾウジョウテン	廣目天 コウモクテン	持国天 チコクテン
降世 カウセ	不動尊 フドウゾウ	慶雲 ケウウン	隆求 リウモウ	普賢 フツケン	文殊 モンジュ	月光 ゲイコウ	日光 ニツコウ	月光 ゲイコウ	日天 ニツテン	地天 チテン	梵天 ボンテン	多聞天 タモンテン	風天 フウテン
不空羅 フウクワ	觀音 クワン	馬頭 バトウ	千手 センジュ	聖觀音 セイクワン	勢至 セシ	地蔵 ヂゾウ	盧舎那 ロシャナ	彌勒 ミロク	薬師 ヤクシ	釋迦 シヤク	金剛 キョウカウ	廣目 コウモク	室利 シヤク
不空羅 フウクワ	觀音 クワン	馬頭 バトウ	千手 センジュ	聖觀音 セイクワン	勢至 セシ	地蔵 ヂゾウ	盧舎那 ロシャナ	彌勒 ミロク	薬師 ヤクシ	釋迦 シヤク	金剛 キョウカウ	廣目 コウモク	室利 シヤク
不空羅 フウクワ	觀音 クワン	馬頭 バトウ	千手 センジュ	聖觀音 セイクワン	勢至 セシ	地蔵 ヂゾウ	盧舎那 ロシャナ	彌勒 ミロク	薬師 ヤクシ	釋迦 シヤク	金剛 キョウカウ	廣目 コウモク	室利 シヤク

二、古文書

文永寺藏古文書は総数二三〇点余を有し、「後奈良天皇御宸筆和」等著名な古文書があり、これら古文書の目録を次に掲載する（昭和十二年発行の文永寺史の目録を掲載）。

一 文永寺文書目録

一、 如来聖像	二、 某位位牌	三、 某位位牌	四、 某位位牌	五、 某位位牌	六、 某位位牌	七、 某位位牌	八、 某位位牌	九、 某位位牌	一〇、 某位位牌	一一、 某位位牌	一二、 某位位牌	一三、 某位位牌	一四、 某位位牌	一五、 某位位牌	一六、 某位位牌	一七、 某位位牌	一八、 某位位牌	一九、 某位位牌	二〇、 某位位牌	二一、 某位位牌	二二、 某位位牌
某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌
某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌
某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌	某位位牌

二三、武田経國傳	天正十五年壬午	一編	『武田』	五二、藤原経國傳	神保三年	一編	
二四、武田経國免状	天正十六年庚寅	一編	『武田川右軍簡云云。』	五三、松平信綱傳	三月廿九日	一編	
二五、六山信重傳状	六月十八日	一編	『信重』	五四、知久定成傳状	三月廿九日	一編	
二六、武田氏御目録	九月廿二日	一編	『信長御遺言後云云。』	五五、高橋守傳状	三月十七日	一編	
二七、正親町天皇御書	七月二十日	一編	『二人とのたより毛利河内と云々云云。』	五六、知久氏免状	八月十七日	一編	
二八、正親町天皇御書	天正十年(文正十年)	一編	『信長御遺言後云云。』	五七、藤原正成傳状	二月十九日	一編	
二九、太田経國御立書	九月五日	一編	『信長御遺言後云云。』	五八、低橋信重御書	永徳二年十一月十五日	一編	
三〇、万葉小治政傳状	天正十一年(文正十一年)	一編	『知久氏免状云云。』	五九、文永御書	寛文二年六月廿七日	一編	
三一、万葉小治政傳状	五月二日	一編	『同日は御下筆云云。』	六〇、西村傳書	六月廿九日	一編	
三二、文永御書	天正十一年(文正十一年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六一、金子孫御書	五月廿日	一編	
三三、上野御書	天正十一年(文正十一年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六二、細川宗隆御書	八月十九日	一編	
三四、正親町天皇御書	天正十一年(文正十一年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六三、細川宗隆御書	八月十九日	一編	
三五、正親町天皇御書	天正十一年(文正十一年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六四、文永御書	九月十四日	一編	
三六、太田経國御立書	天正十三年	一編	『同日は御下筆云云。』	六五、知久御書	十一月十一日	一編	
三七、正親町天皇御書	天正十六年(文正十六年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六六、五宮院御書	宝永二年四月廿七日	一編	
三八、文永御書	天正十八年(文正十八年)	一編	『同日は御下筆云云。』	六七、永代御書	四月廿七日	一編	
三九、備前守傳状	六月廿八日	一編	『同日は御下筆云云。』	六八、可成御書	四月廿七日	一編	
四〇、太田経國御立書	九月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	六九、高田御書	四月廿七日	一編	
四一、毛利経國御立書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七〇、文永御書	四月廿七日	一編	
四二、宮内省御立書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七一、藤原正成傳状	四月廿七日	一編	
四三、知久氏免状	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七二、大徳御書	正月十七日	一編	
四四、常陸守御書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七三、水島御書	正月十七日	一編	
四五、常陸守御書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七四、豊前御書	正月十七日	一編	
四六、備前守御書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七五、知久御書	正月十七日	一編	
四七、文永御書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七六、新六郎御書	正月十七日	一編	
四八、朝田守傳状	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七七、知久御書	正月十七日	一編	
四九、朝田守傳状	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七八、知久御書	正月十七日	一編	
五〇、朝田守傳状	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	七九、知久御書	正月十七日	一編	
五一、文永御書	八月十六日	一編	『同日は御下筆云云。』	八〇、知久御書	正月十七日	一編	
				八一、知久御書	正月十七日	一編	
				八二、知久御書	正月十七日	一編	
				八三、知久御書	正月十七日	一編	
				八四、知久御書	正月十七日	一編	
				八五、知久御書	正月十七日	一編	
				八六、知久御書	正月十七日	一編	
				八七、知久御書	正月十七日	一編	
				八八、知久御書	正月十七日	一編	
				八九、知久御書	正月十七日	一編	
				九〇、知久御書	正月十七日	一編	
				九一、知久御書	正月十七日	一編	
				九二、知久御書	正月十七日	一編	
				九三、知久御書	正月十七日	一編	
				九四、知久御書	正月十七日	一編	
				九五、知久御書	正月十七日	一編	
				九六、知久御書	正月十七日	一編	
				九七、知久御書	正月十七日	一編	
				九八、知久御書	正月十七日	一編	
				九九、知久御書	正月十七日	一編	
				一〇〇、知久御書	正月十七日	一編	

八四	富士十兵衛宗親所願高僧遺徳記状	二月二十日
八五	藤原八郎御符ノ写	四月七日
八六	本陣御所及門内状	一
八七	藤原頼朝大納言藤原入水門内口状	明和四年夏
八八	加久田内口状	明和四年夏
八九	文永寺遺徳記可状	天明四年夏
九〇	金谷宗直御符可状	天明四年夏
九一	文永寺境内遺徳	三月十六日
九二	金谷宗直御状	三月十六日
九三	田中玄成御状	四月一日
九四	五蓮院御状	四月一日
九五	真田宗直御状	四月一日
九六	成徳院遺徳御状	四月一日
九七	田中玄成御状	四月一日
九八	金子宗直御状	四月一日

2、文永寺記録目録

書符	名	林	数	真 佛 其 の 他
一	五蓮院御状	一冊	私記元年八月廿三日關原印本和紙御状	
二	藤原宗直	一冊	文永十三年八月九日佛文永寺遺徳記御状	
三	藤原宗直御状	一冊	長永二年一月廿日於佛遺徳記御状(稿) 長永二年正月廿日於佛遺徳記御状(稿) 長永二年正月廿日於佛遺徳記御状(稿)	
四	遺徳御状	一冊	明和四年五月廿日佛遺徳記御状(稿)	
五	遺徳御状	一冊	明和四年五月廿日佛遺徳記御状(稿)	
六	千手佛 理成(金書)	一冊	千手文永元年正月一日佛遺徳記(稿) 一冊 千手文永元年正月一日佛遺徳記(稿) 一冊	
七	結縁遺徳御状	一冊	水永十三年八月廿日 長壽寺	
八	結縁遺徳御状	一冊	遺徳御状	
九	金谷宗直 下	一冊	水永十三年七月廿七日遺徳 生淨寺	
一〇	金谷宗直 上	一冊	水永十三年七月廿七日於佛遺徳記御状(稿) 一冊 水永十三年七月廿七日於佛遺徳記御状(稿) 一冊	
一一	伝法遺徳御状	一冊	水永十三年七月廿七日 佛遺徳	
一二	神代文一抄本	一冊	水永十三年六月十六日 長命堂記	

- 一三、分帳遺徳御状(必録)
- 一四、結縁遺徳御状
- 一五、太元山遺徳御状
- 一六、結縁遺徳御状(必録)
- 一七、佛遺徳御状
- 一八、佛遺徳御状
- 一九、太元山遺徳御状
- 二〇、太元山遺徳御状
- 二一、五子之防衛御状
- 二二、佛遺徳御状
- 二三、佛遺徳御状
- 二四、佛遺徳御状
- 二五、佛遺徳御状
- 二六、文永寺御状
- 二七、佛遺徳御状
- 二八、佛遺徳御状
- 二九、佛遺徳御状

三、金石文

- 1 石室屋根石下端
 文永寺石室屋根石下端の刻銘以外、境内及び墓地にも石遺物がある。
 弘安六年
 左衛門尉
 庚未十二
 月二十九日 神教幸
 神教幸造 生年十六
 南都石工 十一歳
 菅原行長
- 2 常夜燈
 常夜燈(正面)
 慶応三丁卯歳(向つて右面)
 卯月大穀旦

一	平神七、十年九月廿日、結縁大徳院御状
二	天正七年、二月廿日、結縁大徳院御状
三	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
四	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
五	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
六	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
七	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
八	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
九	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一〇	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一一	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一二	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一三	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一四	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一五	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一六	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一七	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一八	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
一九	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二〇	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二一	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二二	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二三	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二四	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二五	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二六	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二七	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二八	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
二九	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状
三〇	天正七年、三月廿日、結縁大徳院御状

3 手水石

4 石燈籠

安永七戌年

享和二戌年

享保十七壬子天

華寄進御寶前(正面)

⑦ 享十七世華英 不生位
十二月二十八日

⑧ 享十八世法印英駿位
十月十六日

觀世音講中

五月十八日 同行
九月九日 九人

元文六年酉天(向つて右面)
三月吉祥日(向つて左面)
施主橋瓜新六郎(背面)

⑨ 文政八乙酉年
十九世法印龍善位
二月初九日

⑩ 文久元年
二十世法印弘善位
十二月廿七日

5 墓石

配置図



⑬ ⑭

第廿二世阿闍梨明桂位
⑪ 大正六年五月初一日

⑫ 二十三世法印弘道本不生位
昭和十九年八月一日

⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

① 大僧都法印俊信不生位
元禄五壬申四月十五日

② 法印俊清 不生位
享保五庚子五月廿九日

6 石造三重塔

元治二乙丑年
⑬ 法印長善不生位
五月□日

⑭ 法印秀善位
八月一日

③ 法印英俊 不生位
宝曆十二壬午二月十七日

④ 法印俊慶 不生位
元禄十一□年五月一日

⑤ 法印觀圓 不生位
万治三年庚子三月廿六日

⑥ 法印英直 不生位
明和五戊子正月四日

僧都定成 法印宗詢
僧都行得西 法印仙耀北
開山阿闍梨隆庵(正面) 律師宗顯左
僧都頼舜 僧都宗信
僧都頼椿 法印宗焚(向つて)

法印英俊 法印英俊
阿闍梨隆庵南 明治四丁亥年
法印俊信右 三月吉祥日
法印觀圓(向つて) 法印英直建立之(背)

第四章 発掘調査

第一節 調査経過

第一項 周辺部調査

基礎石を除く、五輪塔・石室の解体作業完了後、その下部についての発掘調査を着手する。

まず、石室基礎石の周囲に敷かれた砂利を除去し、基礎の配置状況を写真撮影した後、基礎の地業等把握のため、石室四方に幅三〇cmのトレンチを設定し掘り下げる。それぞれ東西南北の方位によりE・W・S・Nトレンチとする。各トレンチは、基礎と考えられる黄色粘質土の面まで掘り下げ、それぞれ写真撮影・実測作業を行う。

トレンチ調査の所見に基づき、基礎石部を除く敷地全体を黄色粘質土の面まで掘り下げる。その時点で調査範囲南東隅に径一m位の楕円形の落ち込みが確認され土坑一とする。引き続き土坑一を掘り下げるが出土遺物はなかった。

基礎地業の確認できず、簡単な基礎石埋め込みの掘り方を北側基礎石下部で認めたのみであった。

土坑一及び基礎掘り方の状況から当初基礎と考えた黄色粘質土の下層に粘質の強い黒褐色土の存在が確認された。

土坑及び基礎掘り方の掘り下げ後全体の写真撮影を行い、周辺部調査を完了。本体下部の調査実施となった。

第二項 敷石等取りはずし作業

周辺部調査作業終了後、正面の土台石を最初に順次東・北・西の石室土台石を取りはずし、最後に五輪塔敷石を取りはずした。

正面(南側)土台石下部は、やわらかな黒色土が入り込んだ状況が認められその土中より近代陶磁器片・ガラス片などが出土する。また、土台石下部は円礫が置かれ、土台石を固定させている。

東側土台石下部は、正面側の外面部に小礫二個を土台石下部に入れ固定しているが、全体的には掘り方内に變えたのみである。五輪塔敷石とのすき間に近世磁器片がわずかに出土した。

北側土台石下部の状況は、土台石そのものの厚さが東西方向で異なり、東側が西側に比べ約半分程のため、東側下部に割石を入れ固定している。五輪塔敷石とのすき間にやわらかい土が入るが石下部は建立時の安定した状態であった。西側土台石下部は、東・北側土台石下部と同様で新しい土の混入は認められず、五輪塔敷石とのすき間にやわらかい土を認めたのみであった。

石室土台石をすべて取りはずした後、五輪塔敷石を取りはずす。下部は、東・北・西側土台石を取りはずした状況と異なり、正面(南側)土台石下部の状況と似る。石下面の土と接する部分はわずかにすき間も認められ、木の根もかたまり入り込んでいる。表面に礫がいくつかが認められ、それを覆うようにやわらかい黒色土がある。また、黒色土中には近世陶磁器片も敷石取りはずしの時点で何点か認められた。

第三項 下部施設の調査

敷石下部の黒色土を除去すると、敷石下部全体に円礫を一×一m程の範囲に敷きつめ、その中心部は礫が無く凹地状になる。

凹地状に礫の抜けた箇所も上面同様黒色土が入り、内部からは近世陶磁器片が出土する。ある程度黒色土を除去した時点で、礫に接して大形の常滑焼甕が埋め込まれているのを確認する。常滑焼甕は、上部が壊れ内部に落ち込んでいる。

礫上面から二〇cm程下位の甕内部から焼骨片が出はじめる。それとともに、同面前後で鉄輪小壺・銭貨などが出土する。

結局、甕内部の約六割に焼骨と炭粒が充填された状態であった。

また、常滑焼甕は、底部中央に径一〇cm程の穴が穿たれ、周囲からの圧力により、全体がヒビ割れた状態であった。

なお、作業進行に伴い甕内部に地下水が湧出し、作業進行に手間どるとともに、当地点の地下水位の高いことを判断させることとなった。

常滑焼甕の内部清掃後、写真撮影・実測作業を行う。

諸作業完了後、下部施設の構築状況及び地盤の強度等を観察し、基礎工事の方途等を検討するため南北方向に二本のトレンチを掘り下げた。また、常滑焼甕については、一担取り上げ復元し、再埋納することとなった。

常滑焼甕をはじめとする出土品については、飯田市考古資料館において復元・実測・写真撮影等の作業を実施した。一連の整理作業終了後、元の位置に埋め戻し、上部基礎工事実施の運びとなった。

第二節 調査結果

第一項 五輪塔・石室の基礎について

約七〇年の間現位置に存立していた石室及び五輪塔につき、建立以来始めてその基礎に至るまでの解体修理となつたわけであるが、本調査において観察

された建立時の基礎工事の状況及び、後世の改変等の状況は以下のようである。
五輪塔敷石

建立時下部施設直上に設置され、下面は下部施設の石積及び常滑焼甕の口縁部に接していたものと判断される。敷石を取りはずした時点で下部全体に観察されたやわらかい黒色土の存在から、何らかの要因により、本敷石はある時期に一担取りはずし据えなおしが行われたものといえる。その時期については、黒色土中より出土した近世陶磁器片・ガラス片等により、明治時代以降といえ、及び地元住民にもその解体につき記憶する者がいないことなどから、明治時代の前半において五輪塔のみを、今解体修理前の形状に据えなおした事実があるといえる。

石室土台石

東・北・西側の土台石は、いずれも取りはずした時点での観察状況によれば建立時のままで、後世に移動された痕跡は全くなかった。

また、その設置のため地業等施した痕跡は認められず、北側の土台石下部に、それを埋めるための浅い掘り方が認められ、材料の形状に合わせ、簡単な根切りを行い、下方の一部を埋置して基礎工事としたものと判断された。

地盤の状況

本建造物の位置する地点の基本的な土層は、上から一五〜二〇cmの黒色を呈する耕作土があり、その下部に黄色の粘質土が一五〜三〇cmの厚さで堆積し、さらにその下部に腐植土的な黒褐色土が五〇〜一〇〇cmあり、その下に黄色砂土が存在するという状態である。

また、本建造物の南西方向は地元住民等の言によれば、以前大きな湿地であったとのことで、本調査により確認された腐植土的な土層の存在はそれをうづかせるものといえる。

さらに、それと強い関連があると考え得るもう一つの要因として、調査中作

裏進行を防げた地下水であるが、現地表面から約1m足らずの所から相当量の湧水があり、かつて、広範囲にわたり湿地もしくは池のような箇所が隣接地にあったといえる。

第二項 下部施設

常滑焼大形甕を中央にその外側に径一〇cm前後の偏平円礫を積み上げた外覆石積とで構成される下部施設である。

常滑焼大形甕

常滑焼大形甕は、五輪塔敷石のほぼ中央下部に位置し、敷石に穿たれた穴から物の出し入れが可能となっている。

甕口縁部が破損して内部に崩れ込んでいる状態から、上部（口縁部）は五輪塔敷石下面に接する高さに設置されていたと考えられる。

内部の状況は経過の中で触れたとおり、甕内部の六割程に焼骨と炭粒が充填しており、ある時期に一括埋入されたものといえる。その時期については、伴出の鉄軸小壺・錢貨等の年代から一五世紀中頃以降といえる。すなわち、埋納された焼骨等と、石室・五輪塔建立時との関連は切り離して考えるべきものといえる。

また、甕の底中央部に径1cm程の穿孔があり、甕そのものは五輪塔の重みを含む土圧等の周囲からの影響により全体がヒビ割れ、地下水が季節によって湧水・乾燥を繰り返したと考えられ、本来有機質の埋納物があつたとしても残存しない状況であるといえる。

外覆石積

常滑焼大形甕外側は、その口縁部から底部にまで、径一〇cm前後で厚さ2cm内外の偏平な円礫を幅三〇〜五〇cmで積み上げ、外部からの力を防ぐ保護的な役割を果たしたものと見える。

全体的には偏平円礫を水平に積み上げているが、甕に接する礫には、甕胴部に平行するように斜めに入ったものもある。また、礫と礫の間は、上部に土が入り込んではいいるが、ほとんどが空間状態である。

下部施設構築にあたり、この外覆の石積外側いっばいの土坑を掘り設置している。

なお、石積後甕を納めたか、甕設置後に外覆石積を行なったかについては、今調査で確定する状況は把握できなかったが、甕と礫との接する面の状況から石積後甕を納めた可能性が高い。

その他の遺構

五輪塔・石室との直接的関連を把握することはできないが、本工事の敷地内から土坑が一基検出された。

土坑は、時代・性格等不明で、本施設との関連を示す資料も出土していないが、何らかの関連する施設である可能性もある。なお、以前に外護欄建設の際に出土地点は不明であるが、常滑焼甕の出土した事実があり、本五輪塔もしくは寺そのものに関連する施設が周辺にあつたことも否定できない。

第三節 出土品について

第一項 常滑焼大形甕

典型的な常滑焼の特徴を良く示す大形の甕である。それぞれの部位の寸法は器高六五・六cm、底部径一五・四cm、口縁部径四三・一cm、胴部内径三七・二cm、最大径六九・七cmを測る。器壁は厚さ一・四〜一・八cmと、器の大きさをすれば全体に薄く仕上げられた優品である。

全体形としては、最大径が底部から五〇cmの位置にあり、肩部を成し、口縁

部径は底部径のほぼ二倍を測り、均整のとれた器である。

口縁部は、頸部からくの字状に強く外反し、屈折部の外面と口唇部上端に浅い沈線状の整形痕が認められる。口唇部はその沈線のため夫気味の先端をなす。

頸部は、5cm程とあまり長くはないがほぼ垂直の立ち上がりを見せる。頸部接点から底部までは肩部を頂点として大きく湾曲し、部分的には紐づくりによる凹凸が表面で観察され、外面はほぼ等間隔に押印文様が五段にわたって施されている。

押印文様は、七・八段に刻まれた格子目文様で、肩部と底部ぎわの段が丁寧に施文され、他の段はやや粗雑に施されている。

頸部から口縁部にかけてと、底部の押印文様施文部以下は他の部分に比べ丁寧に造られ、ロクロ仕上げの様子も見られ、全体の製作工程を示している。

また、内面でも製作工程を示すものとして、頸部と肩部の接続部に指頭によるナデ痕跡があり、胴部においては紐造りの痕跡を示す接続痕が五本確認でき、全面を粗いヨコナデして仕上げとしている。

底部は、底面から一〇cm程が別造りで、丁寧に仕上げられ、底外面の外縁部が3cm程の巾でザラザラしており、製作時の砂粒付着痕を認めることができる。

表面の状態は、器自身が大型のため部位によってかなりの変化が認められ、口縁部から肩部の一部に灰釉のかかる箇所があり、その部分は全体に黄灰色を呈し、その周囲の灰釉のかかりの薄い部分は、気地の色調により黒く光っている。灰釉のかからない部分については、全体が赤褐色・黒褐色・はだ色の部分とで構成されている。内面はほとんど釉薬がかからず、全体が赤褐色を呈し、表面に小さな黒色の斑点も認められる。

胎土は全体にはだ色に近い赤灰色を示し、均質化された精良な陶土を用いている。

なお、底部中央に内部から外部にかけ広がる、径九mmの穿孔がある。

第二項 副 葬 品

常清焼埋内部より、焼骨に伴って鉄軸小蓋・錢貨などが出土しており、これらを副葬品として扱う。

鉄軸小蓋

底径二・三cm、口径四・〇cm、高さ五・九cmを計る。全体形は、胴下半の底部ぎわに最大径があり、口縁ぎわの径が小さい下ぶくれの器である。頸部と口縁部は一体といえ、ほぼ垂直に立ち上がり、わずかに外反して端部となる。

表面は全体に黒褐色の鉄軸がかかる。口唇部及びロクロ痕の高くなった箇所は薄くかかり茶褐色となる。それ以外は深いこげ茶色の釉薬を底部から五mmまでの外面全体施軸している。

内面は口縁部のみに釉薬がかかり、他はほとんど無釉で、底部の一部に斑点状に釉の付着がみられる程度である。

内外面ともに釉薬のかからない部分は灰白色を呈し、胎土は精選された極めて緻密な土を用いている。

土師器小皿

口径五・六cm、底部二・〇cm、高さ一・七cmを計り、全体が手づくねで作られた素焼きの小皿である。

器面全体に指頭による整形を行い、その上を指頭によって水引し最終調整している。底部は、最終段階で指頭による押えがなされ、外面は穴状に、内面は凸状部が作られ、皿としての安定性を作っている。口唇部は手づくねのため、全周が不規則な波状となっている。

表面は、外面底部付近に黒褐色の部分がある他は、全体が黄褐色土を呈する。胎土は、微石粒を含むが総体として良好である。

小 玉

性格等不明の小玉二点が出土している。

一点は、径四mm、厚さ二mm、穴の径一・五mmを計り、もう一つは径四mm、厚さ二mm、穴の径一mmを計るほぼ同じ大きさのものである。

材料の確定はできないが、石とは認め難く、貝製品の可能性が高い。

用途・目的等は不明であるが、出土層位等から焼骨・錢貨とともに運納されたものである。

錢貨

常清焼塚内部より合計二十七枚の錢貨が出土しており、うち一枚は寛永通宝で他とは性格が異なり、後世の混入品と考えられる。

二六枚はいずれも強い火燃を受け、ゆがみやヒビ割れ、互いに融着したものである。初鑄年であると、開元通寶の六二二年を最古に朝鮮通寶の一四三三年までである。主体は宋錢であるが、朝鮮通寶の他明朝の永樂通寶もあり、埋納時期を示す材料といえる。

常清焼塚内部出土錢貨一覧表

錢名	枚数	初鑄年	國名	備考
開元通寶	一	空三	唐	全体にゆがみ有り
咸平元寶	一	堯六	唐	全体に黒色で状態良好
天聖元寶	一	〇〇三	宋	天は左六、文字不鮮明
皇宋通寶	四	〇〇七	宋	二枚融着、全体ゆがみ、文字不鮮明
熙寧元寶	一	〇〇六	宋	皇宋通寶と不明品の計三枚で融着、文字不鮮明
元豐通寶	二	〇〇八	宋	一枚は皇宋通寶と融着、文字不鮮明
元祐通寶	一	〇〇六	宋	全体にゆがみ、文字不鮮明
紹聖天寶	一	〇〇四	宋	全体にゆがみ、文字不鮮明
政和通寶	二	〇〇三	宋	一枚は不明品と融着、全体にゆがみ、文字不鮮明

錢名	枚数	國名	備考
淳祐元寶	一	宋	ヒビ割、裏面にも文字が文様有
永樂通寶	二	明	文字鮮明、不明品一枚も裏面から可能性あり
朝鮮通寶	一	朝鮮	文字鮮明
〇定元〇	一	朝鮮	半欠品、嘉定元寶(一一二〇八)と考えられる。
不明	七	融着等により錢名の判読できないもの	
寛永通寶	一	日本	後世の混入品である。
合計	二七		

第三項 その他の出土品

五輪塔敷石下部及び、石室土台石周囲の耕作土中より、近世陶磁器片を主体に若干の出土品がある。

本施設と年代的に関連すると考えられるものとしては、常清焼の甕片が数片ある。いずれも胴部の破片で年代の確定が難しく、直接本施設との関連性は難しいが、以前に周囲の構設置工事の際発見され、現在文永寺にて保管中の常清焼甕と同一品の可能性もあり、本施設もしくは当時の文永寺そのものとの関連も類推できるものである。

他に直接の関連は考えられないものとして、縄文時代の打製石斧片数点・近世から近代の陶磁器片・鉄製品類若干が出土している。石器以外については、信仰対象物としての五輪塔に対する供献品の破損品とも考えられ、間接的な関連は否定できない。

いずれも、本施設との直接、特に建立時との関連は認め難く、図示等は割愛し、出土した事実報告とする。

第四項 まとめ

発掘調査の結果、下部施設の存在という新しい発見があったわけであるが、

それによりいくつかの問題点が指摘でき、それに若干の考察を加え、下部施設発掘調査のまとめとした。

五輪塔・石室の建立年については、石室天井石に刻まれた年号から、弘安六(一一八三)年は動かし難いものといえる。しかし、下部施設の主体ともいえる常滑焼大形甕は、その製作技法・形状等からみて製作年代は二世紀も前半の所産とするのが妥当といえ、新しくみても二世紀代の中でののみ考え得るものといえる。

單純に考えても、五輪塔建立時と常滑焼甕製作年との間は一〇〇年を超えている。生産地もしくは消費地のいずれかにおいて実質的な用途をもつて使用、もしくは保管されていたものを埋納したといえる。しかし、二世紀代とされる常滑焼大形甕の主な用途は、納経容器もしくはその外容器としての例がほとんどである。また、その需要地は畿内が主体で広範囲にわたつておらず、その生産量も限られたものであった可能性もある。それらから、当該容器の長年にわたる伝世は考え難く、本器の埋納時期・用途について疑問点あるいは示唆する点が生じて来る。逆に、常滑焼そのものの研究にも一石を投ずる可能性が本器の使用形態等から生じたともいえる。

次に、常滑焼甕内部に埋納された焼骨及び副葬品についてであるが、個々の出土品から判断し得る年代及びその状況から、五輪塔建立時と同時に埋納されたとは考えられない。

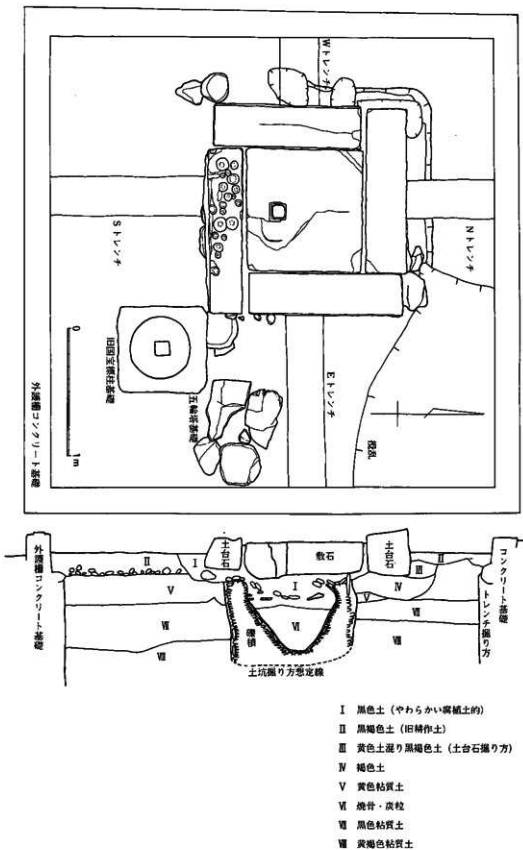
即ち、年代の明らかな資料として二六枚出土した錢貨のうち最も新しい初韓年代を示す朝鮮通貨は、西暦一四三三年と一五世紀前半代であり、同じく鉄箱小蓋の製作年代も一五世紀以降とするのが妥当であり、甕内部に焼骨等が納められた年代は一五世紀以降といえる。また、朝鮮通貨より新しい錢貨の無いことから一五世紀も半ば以降とは考え難く、その時期は一五世紀中頃と推測される。つまり、出土した錢貨のいずれもが、かなり強い火燃を受けており、他所

で火葬された人骨を一括して、五輪塔建立から約一五〇年経た後に埋納したものと見える。

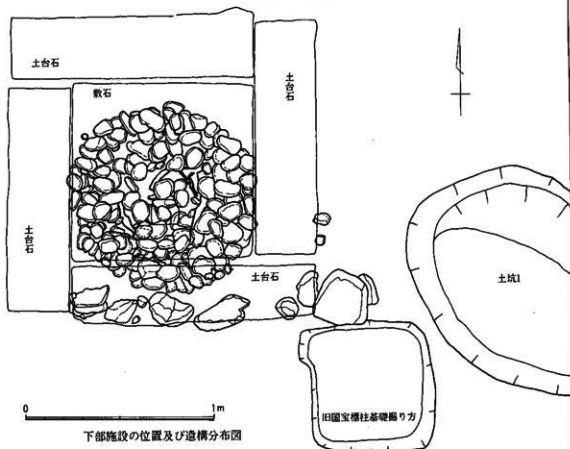
果して、焼骨等の埋納が本施設建立の本来の目的と合致するものか否かは即断できないが、相互の年代差からみて直結しないといえる。しかし、それらが埋納された時代(仮に一五世紀として)においても隆盛を誇った文永寺の管理下にあつて、本五輪塔建立者の意志は隠れてはいたはずである。それにより、甕内部からの出土品は、五輪塔建立者の一族もしくは、それと強いつながりを持つものであることは否定できない。

最後に、出土品からみた五輪塔建立の主旨についてであるが、下部施設である常滑焼甕内部から五輪塔建立時と合致するものが皆無であり究め難いといえる。しかし、畿内地方に類例の求められるように常滑焼大形甕を用いた納経施設であつたことも推測される。このことは、本地地の地下水等の環境条件下にあつて有機質の残存する可能性のほとんど無いことからその推測が許されると考えられる。

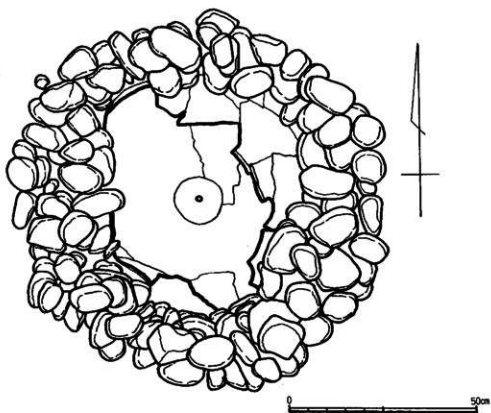
第17図 土台石・敷石等平面分布図、南北方向断面図



第18図 下部施設

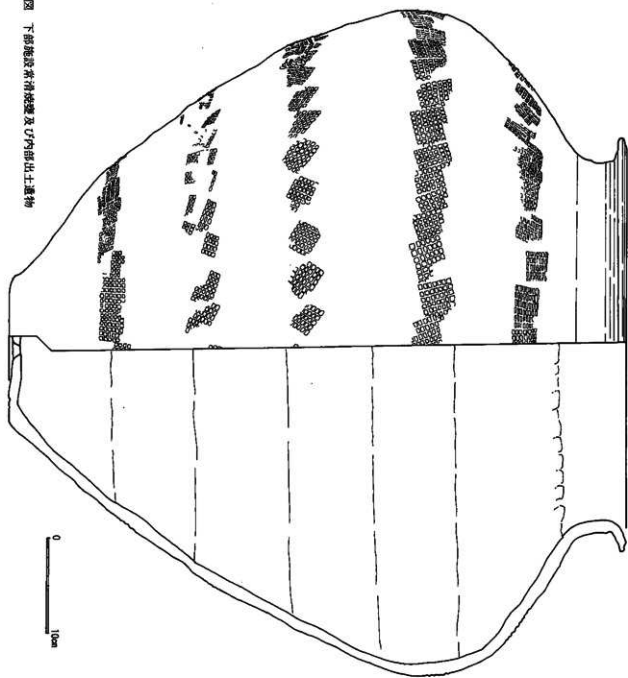


下部施設の位置及び遺構分布図



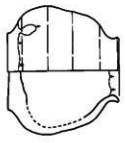
下部施設浮き石等除去後平面図

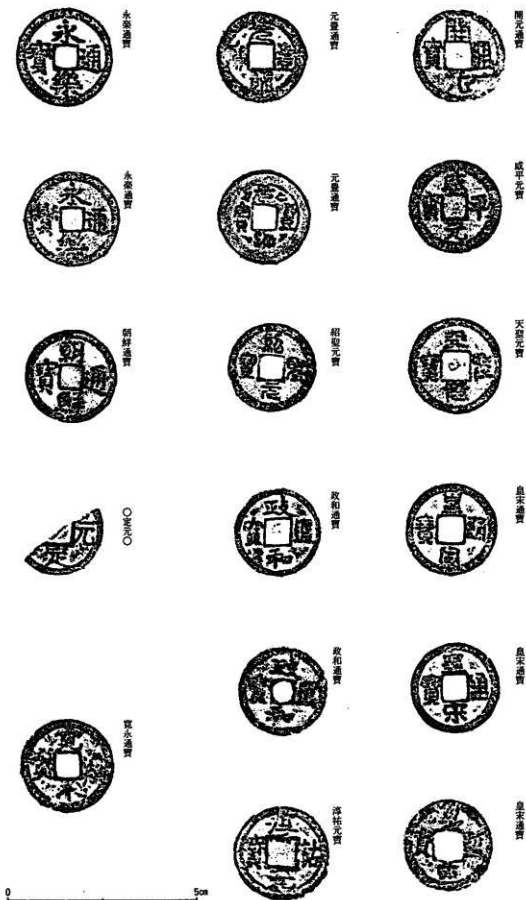
第19圖 下部施絞索溝及內部出土遺物



0 10cm

0 5cm



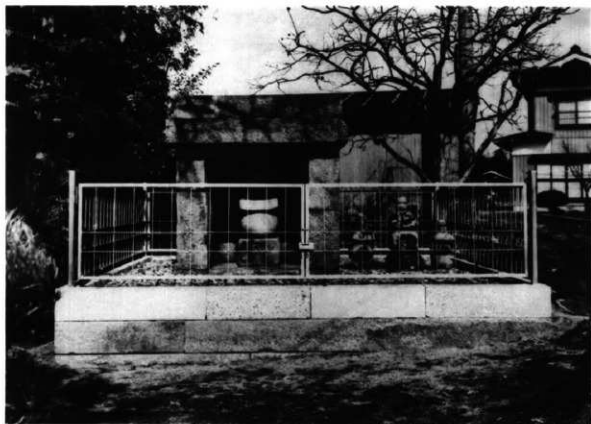


第20圖 下部施設内部出土錢貨

圖 版



1 埭工 石室・五輪塔



2 竣工 正面(南面)



3 修理前 正面(南面)



4 竣工 正面面(南西面)



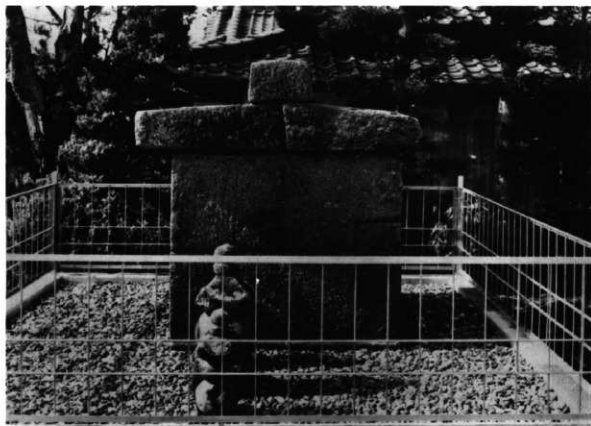
5 修理前 正面面(南西面)



6 竣工 背面(北東面)



7 修理前 背面(北東面)



8 竣工 側面（東面）



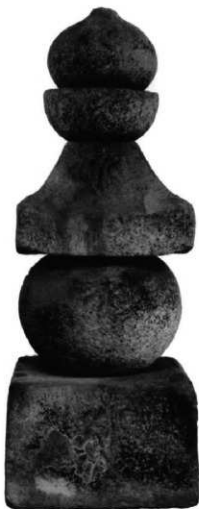
9 修理前 側面（東面）



11 五輪塔(南面)



12 五輪塔(西面)



13 五輪塔(北面)



14 五輪塔(東面)



キヤ
カ
ラ
バ
ア

キヤ
カ
ラ
バ
ア

キヤク
カク
ラク
バク
アク

キヤン
カン
ラン
バン
アン



15 壁石のすれ（背面）



16 同上



17 棟木欠失



18 屋根石風蝕（背面）



19 屋根石（背面側）



20 屋根石下端（正面側）



21 敷石上端



22 土台石不同沈下



23 保護柵解体中



24 棟石取外し中



25 屋根石(背面側)取外し中



26 屋根石取外し中（背面東側）



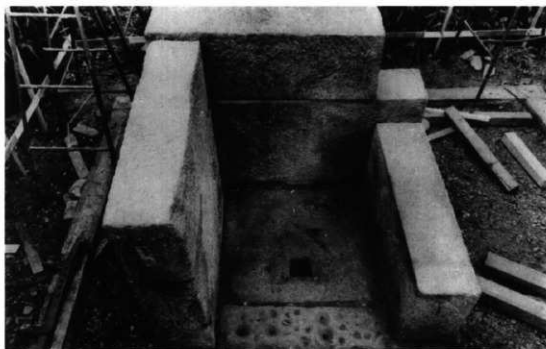
27 屋根石取外し中（背面西側）



28 屋根石取外し完了



29 壁石取外し中（北東隅上段）



30 壁石取外し中（手前正面）



31 壁石取外し中



32 壁石取外し中



33 壁石取外し中
(西面下段内側)



34 壁石取外し完了



35 敷石（土台取外し）



36 敷石取外し（手前玉石は土台石の觸物用、奥の玉石は壺を囲むように積上げた石）

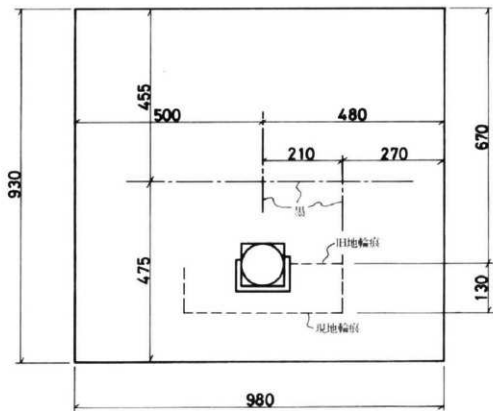
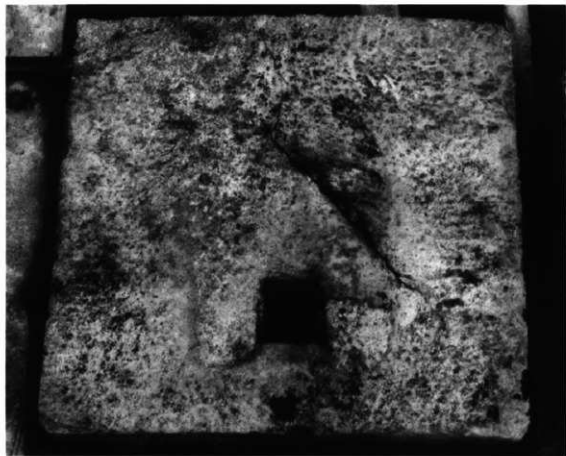


37 土を取り除いた状態（敷石沈下により壺の上部が破壊され、内部に落ち込んでいた）

現状変更

要旨 五輪塔 約一三センチメートル後方に移動する。

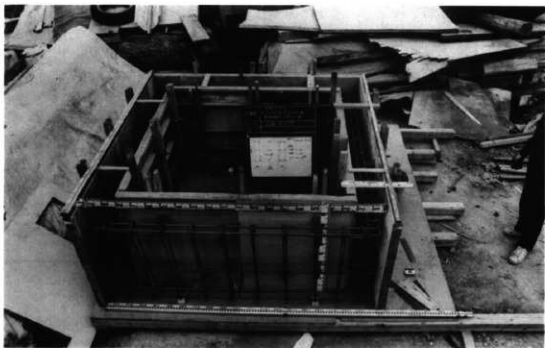
38 数石上端（曇及び当り痕がある）



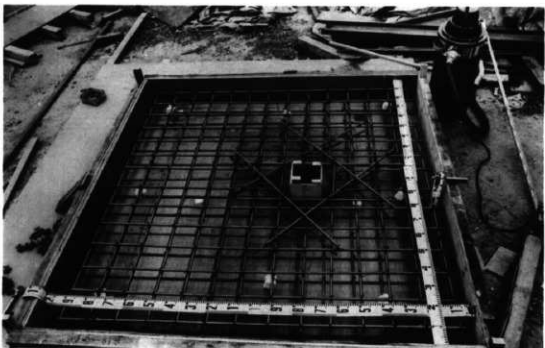
※単位はmm



39
根切



40
布基礎配筋



41
スラブ配筋



42 コンクリート布基礎据付中



43 骨盛器据付中



44 同上 据付完了



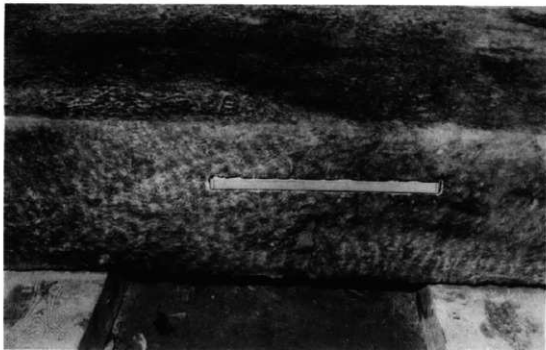
45 コンクリートスラブ据付完了



46 防水処理(SS一〇一塗布)



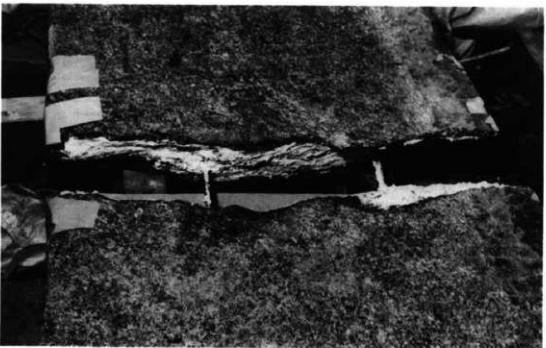
47 屋根石亀裂部錠補強



48 屋根石亀裂部竪補強



49 屋根石破断面ステンレス筋挿入



50 屋根石接着



51 敷石土台石据付完了



52 壁石積上げ完了(一段)



53 同上(二段)



54 屋根石据付完了



55 礎石据付完了



56 指定外五輪塔三基据付完了



イ 正面面



ロ 内部

57 仏隆寺石室



58 十輪院石仏金剛



イ 正面面



ロ 内 部 (清水を満ちている)

59 岩船寺石室



イ 正面面



ロ 屋根背面

60 守福寺宝殿



イ 正面



ロ 背側面



ハ 背側面

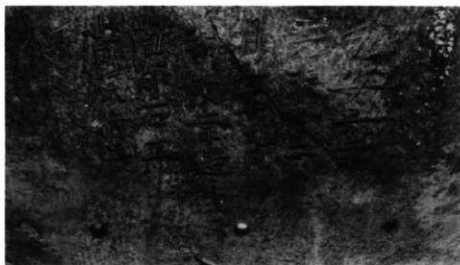


ニ 棟頂上に刻まれた樺子（キリノク）

61 隆崇院石室千体仏（岐阜県忠那郡岩村町史跡。江戸時代・寛永九年）



63 屋根石下端銘文



64 文永寺史（昭和十五年）刊行時に執られた拓本（下伊那教育委員会所蔵）





66 常夜燈（慶応三の銘有）



65 文永寺参道（中央奥は「天門」）



68 手水舎（享保十七の銘有）



67 石燈籠（元文六の銘有）



70 石造三重塔（明和四の銘有）



69 文永寺歴代住職の墓石



(2)



(1)



(4)



(3)



(6)



(5)



(8)



(7)



72 古文書（文永寺所蔵、15・16世の項）



73 古文書（文永寺所蔵、15・16世の項）



74 敷地内全景



75 北西隅土台石下部掘り方



76 北側土台石下部掘り方

77
南側土台石下部



78
北側土台石下部

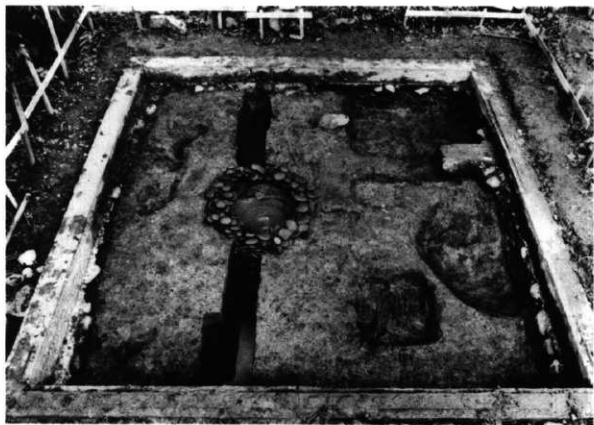


79
土台石・敷石下部





80 下部施設礫検出状態



81 下部施設掘り下げ後全景



82 下部施設

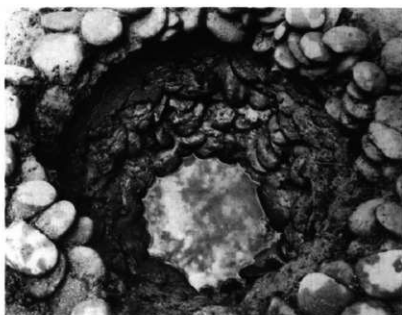
83
N
トレンチ
断面



84
S
トレンチ
断面



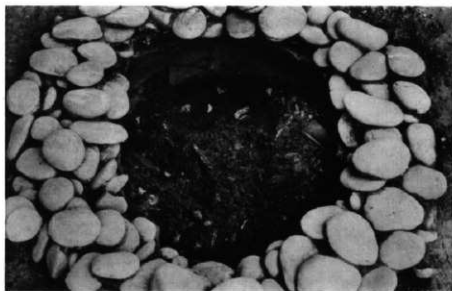
86 外護石積外面



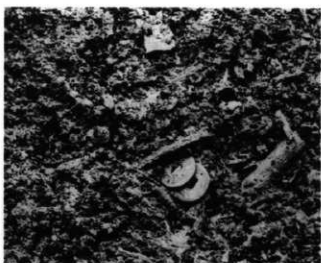
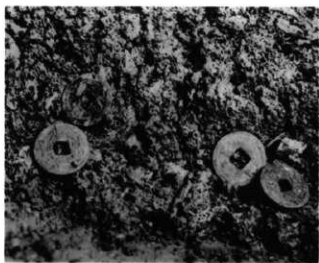
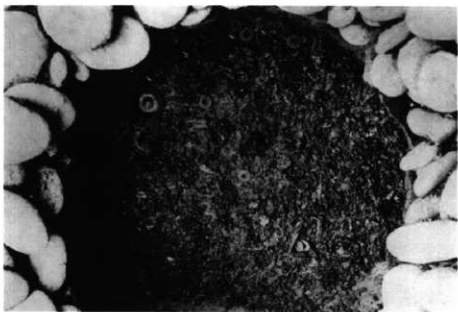
85 奥取りはなし後の状態



87 鉄輪小壺出土状態



88
焼骨出土状態





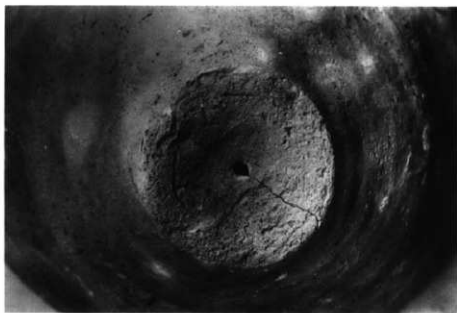
90 常滑焼大型甕

91
同肩部押印文様

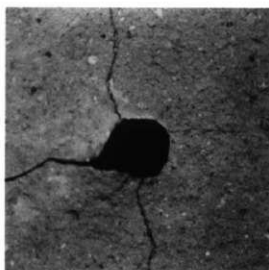


92
同胴部押印文様





外面



内面

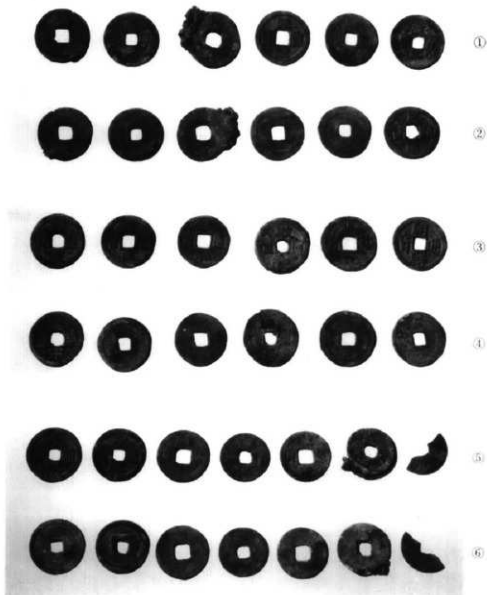




95 土師器小皿



96
小玉



97
斐内部出土錢貨（上段表面、下段裏面）

①

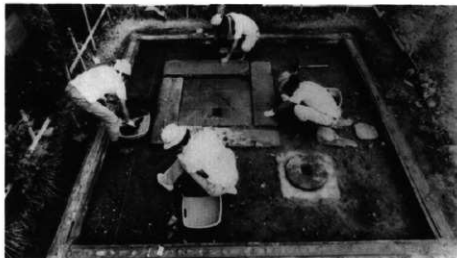
②

③

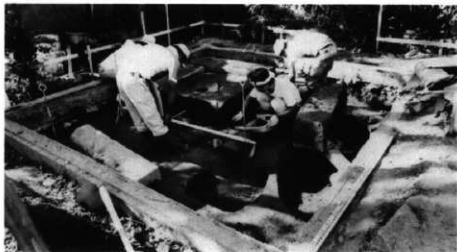
④

⑤

⑥



98
トレン手振り



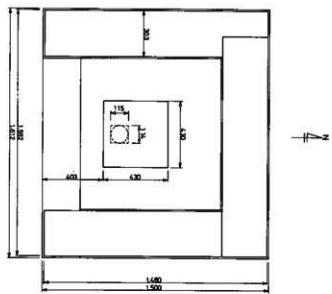
99
土台石取りはずし



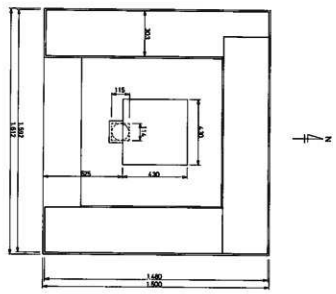
100
築内部掘り下げ



101
築取りはずし



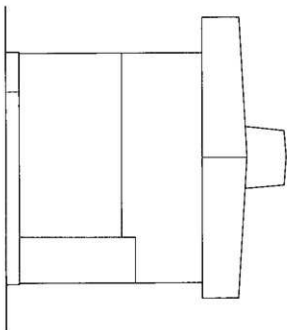
第一区 修理前平面図(石室・五輪塔)



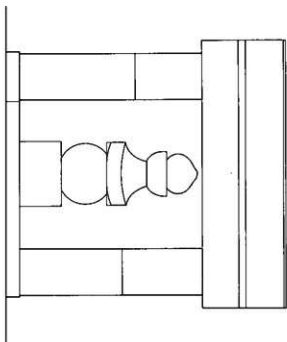
第二区 竣工平面図(石室・五輪塔)



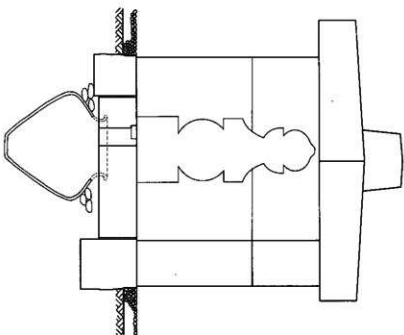
第四图 竣工断面图(已衬)



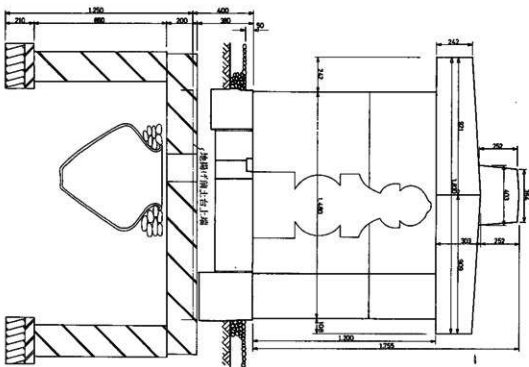
第三图 竣工正面图(衬砌·五峰塔)



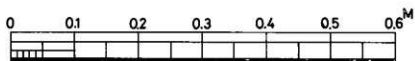
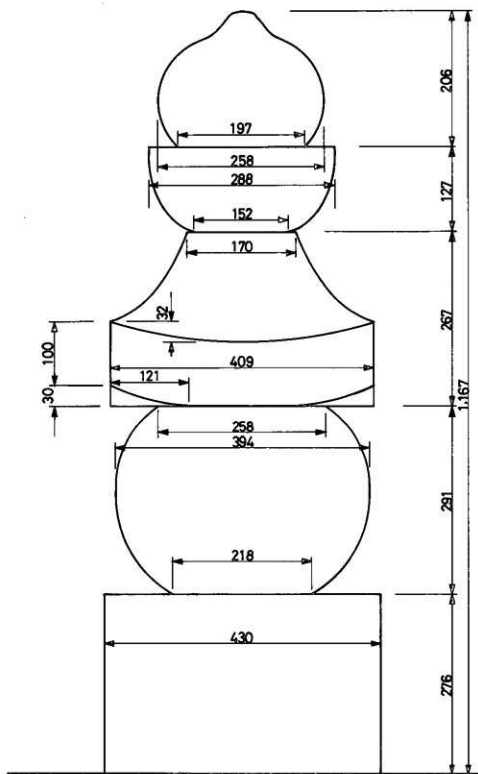
第六图 修棚架的断面图(台基·五榀架)



第五图 竣工断面图(台基·五榀架)



第七圖 竣工 立面圖 (五輪塔)



昭和六十二年三月

重要文化財文永寺石室・五輪塔修理工事報告書

編 集 財団法人 文化財建造物保存技術協会

発 行 重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存
修理委員会

印 刷 有限会社 莫 陽 社
製 本 京都市下京区油小路仏光寺上九

